仙台市文化財調査報告書　第206集

仙台市
中田南遺跡

――第２次調査報告書――

１９９５年７月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書　第206集

仙台市

中田南遺跡

——— 第２次調査報告書 ———

１９９５年７月

仙台市教育委員会

序　　文

仙台市の文化財保護行政に対しましては、日頃から多大なご協力をいただき、誠に感謝にたえません。本市の南東部に位置する太白区中田地区は、以前は豊かな田園風景が広がり、おもに近郊農業が営まれてきました。しかし、近年の急速な市街化に伴い、仙台市のベッドタウンとして新しく生まれ変わりつつあります。

この度の中田南遺跡の発掘調査は、平成４年の第１次調査に続く第２次調査にあたり、同じく宅地造成に伴って実施されたものです。前回の調査では、古代の大規模な集落跡や中世の屋敷跡などが発見され、当時の人々の生活を解明するうえで、貴重な成果が得られました。今回の調査でも、平安時代の畠跡や中世の井戸跡などが発見され、それぞれの時代の集落の範囲や生産域などがさらに広がることが明らかにされました。

本書は、このような調査成果を収録したものであります。その内容が今後の当地域の歴史を考える上で役立つところがあれば幸いです。

本市には重要な文化財が数多くあります。先人の残した貴重な文化遺産を次の世代へ継承していくことは、現代に生きる私たちの重要な責務であります。今後とも、文化財保護への深いご理解とご協力をお願い申し上げます。最後になりましたが、発掘調査や報告書の作成にあたり、多大のご指導、ご協力をいただきました多くの方々に対しまして、心より感謝申し上げます。

平成７年７月

仙台市教育委員会

教育長　坪山　繁

例　　言

1．本書は、宅地造成に伴う宮城県仙台市中田南遺跡の発掘調査の成果をまとめたものである。(中田南遺跡については、平成4年（1992年）の調査を第一次調査とし、今回の調査を第二次調査とする。)

2．報告書の作成および編集は、三塚　靖・太田昭夫が行った。

3．第Ⅶ章の分析結果には、木製品の樹種同定結果を掲載した。

4．発掘調査および資料の整理に際し、次の方々から多くの指導・助言を賜った。記して感謝の意を表する次第である。(順不同・敬称略)

　高橋利彦・蟹澤聰史・三辻利一・松本秀明

5．石製品の材質の鑑定は東北大学理学部の蟹澤聰史氏にお願いした。

6．調査・整理に関する諸記録および出土遺物は仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．本報告書の土色については、「新版標準土色帖」(小山・竹原：1976) を使用した。

2．建設省国土地理院発行の地形図を使用したものは、図中に示した。

3．本文中使用の「灰白色火山灰」(庄子・山田：1980) の降下年代は、現在、10世紀前半頃と考えられている。(白鳥：1980)

4．図中および本文中使用の方位の北(N)は、すべて真北である。なお、グリッドの南北ラインは真北に対して、15.5° 東に偏している。

5．本書の遺構については、検出順に番号を付し、次の略号も必要に応じて使用した。

　井戸跡－ＳＥ、土坑－ＳＫ、溝跡－ＳＤ

6．本書の出土遺物の登録に際しては、次の略号を使用した。

　縄文土器－Ａ、弥生土器－Ｂ、陶器－Ｉ、銅製品－Ｎ、木製品－Ｌ、石製品－Ｋ、灰釉陶器－灰

7．遺物観察表内の計測値で、土器に関して、その復元値が不明な場合は－を付した。その他の遺物のカッコ内の値は残存値である。

目　　次

序　文
例　言
凡　例
目　次
Ⅰ．調査に至る経過……1

Ⅱ．調査要項……1

Ⅲ．遺跡の位置と環境……2

Ⅳ．調査の方法と概要……5

Ⅴ．基本層序……6

Ⅵ．発見された遺構と出土遺物……7
　1．柱穴列とピット群……7
　2．井戸跡……8
　3．土坑……15
　4．溝跡……15
　5．小溝状遺構群……17
　6．その他の遺物……18

Ⅶ．分析結果（樹種同定）……22

Ⅷ．まとめ……24

引用参考文献……25
写真図版……27

Ⅰ．調査に至る経過

今回の調査は、この地区一帯の宅地造成の変更に伴うもので、平成６年５月19日に提出された開発行為変更事前協議が話し合いのスタートラインであった。既に平成６年度の事業がスタートしており、その予定も満杯であったことから、調査は平成７年度としていたが、面積が大きくないことや一昨年度の調査によって、遺構、遺物密度が小さいことが予測される地点だったので、出来れば年度内に実施したいとも考えていたところであった。

文化庁への届出は平成６年６月17日付で提出された。

８月までは晴天が続き、各現場は予定より早めに調査は進んだが９月に大雨が続き、急に現場の進行が足ぶみしたので、ギリギリまで年度内調査が出来るかの判断が遅れた。協議の結果、12月早々に現場開始することになり、平成６年11月22日付で業務委託契約を結んだ。年末の調査になったので、報告書刊行については平成７年度の契約で行うこととした。

Ⅱ．調査要項

（１）遺 跡 名：中田南（なかだみなみ）遺跡（宮城県遺跡登録番号01272　仙台市文化財登録番号Ｃ－212）

（２）所 在 地：仙台市太白区中田七丁目225－１

（３）調査主体：仙台市教育委員会

（４）調査担当：仙台市教育委員会文化財課調査係

担当職員：太田昭夫・三塚　靖

（５）調査期間：野外調査　平成６年12月１日～平成６年12月22日

室内整理　平成７年１月５日～平成７年３月24日

（６）調査対象面積：260㎡

（７）調査面積：約210㎡

Ａ区 58.5㎡　　Ｂ区 151.25㎡

（８）発掘調査参加者

＜野外調査＞　赤間淳子　植野幸子　太田君子　佐々木瑞枝　佐藤とき子　菅井清子　丹野正彦

芳賀節子　松野順子　我妻美代子

＜室内整理＞　植野幸子　太田君子　菅井清子　佐々木瑞枝

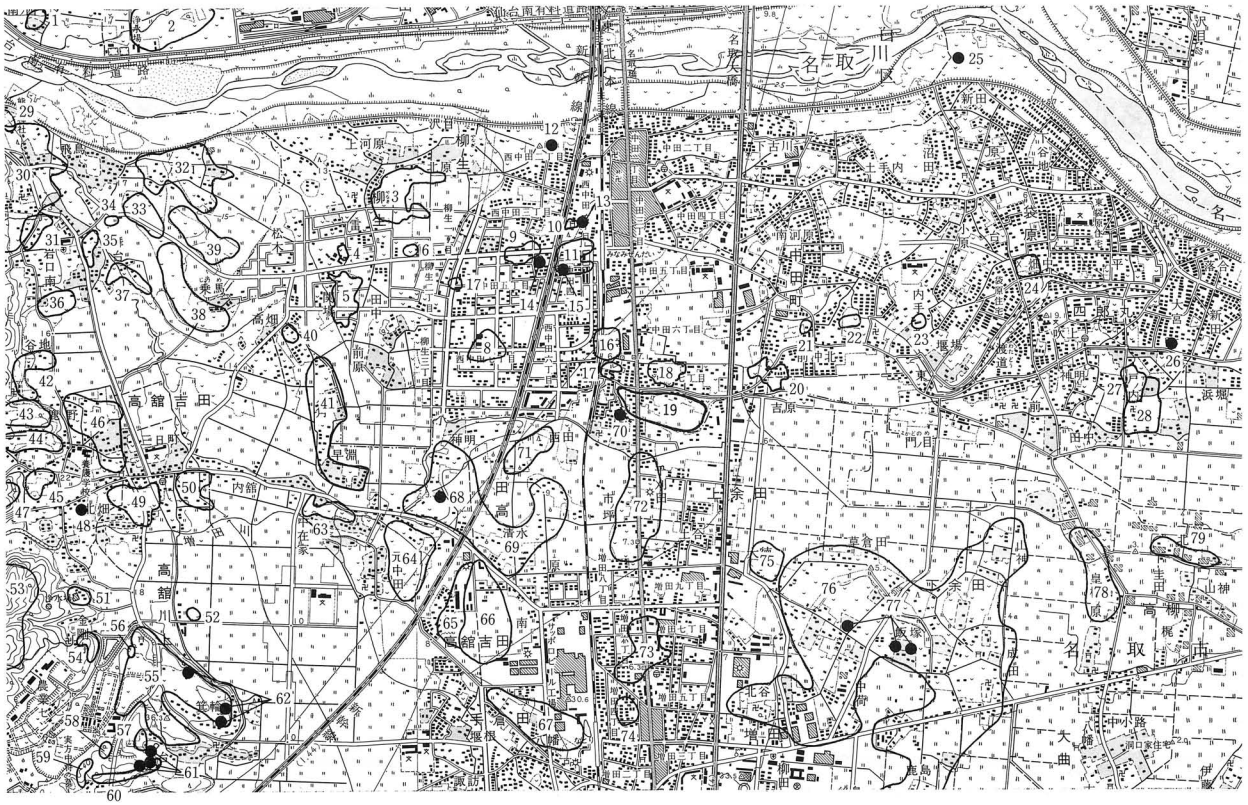
Ⅲ．遺跡の位置と環境

遺跡の位置：中田南遺跡は、宮城県仙台市太白区中田七丁目に所在する。そこは、仙台市の南東部にあり、その中でも、最南端に位置する。遺跡のすぐ南には、名取市が隣接する。県庁や仙台市役所のある中心部からは南に約９kmの地点であり、旧国道四号線が遺跡内を縦断している。今回の調査対象箇所は、遺跡の北東部にあたり、中田七丁目225－1外番地にある。

地理的環境：中田南遺跡の位置する仙台市の南東部周辺の地形を概観すると、丘陵・台地・低地に三分される。そして、これらの中を名取川・広瀬川が南東方向に流下し、仙台湾に注いでいる。丘陵は、標高100～500m前後の陸前丘陵と総称される丘陵群の一部であり、台地は、河川に沿う河岸段丘の分布域である。低地は、主として、名取川・広瀬川などの下流域に広く分布しており、宮城野海岸平野と呼ばれている。標高は20m未満で、自然堤防をはじめ、旧河道や後背湿地が複雑に分布し、また、海岸線付近では、浜堤や砂浜海岸などが分布している。中田南遺跡は、こうした海岸平野と呼ばれる低地にあり、名取川下流域の南岸部に形成された自然堤防上に立地している。この自然堤防と周囲の旧河道・後背湿地との比高差は約１ｍである。遺跡の南側を走行する旧河道は、現状でも幅20m程の帯状の凹地として残存しており、旧河道上には、「境堀」と呼ばれる水路が走っている。この付近では、この水路の中心線が、現在、仙台市と名取市との市境になっている。

今回の調査対象箇所は、以前から、水田・畑地・芹田などの農地として利用されてきた。調査区の西側には、旧国道四号線、東側には、国道四号線（仙台バイパス）が走っている。中田地区の農地は徐々に都市化の影響を受け、住宅地や商業地へと変化しつつある。

歴史的環境：中田南遺跡の位置する名取川下流域は、県内では最も遺跡の多いところであり、古くから人類の生活が営まれてきた地域でもある。ここでは、名取川下流域の南岸部を中心に述べる。仙台市南西部の全体的な歴史的環境についての詳細は、中田南遺跡第１次調査報告書（太田：1994）を参照されたい。旧石器時代の遺跡としては西野田遺跡などが知られており、これらは台地および丘陵上に立地している。縄文時代の遺跡としては今熊野遺跡や金剛寺貝塚などが知られており、旧石器時代と同様に遺跡の多くは台地および丘陵上に立地している。低地に立地する遺跡が増加するのは、弥生時代以降であり、弥生時代の遺跡としては安久東遺跡・清水遺跡・後河原遺跡などが知られている。古墳時代に入ると、現海岸線に近い地域まで遺跡の分布が広がり、安定した土地条件が成立するとともに、技術的進歩の様子が伺われる。この時代の遺跡として、安久東遺跡・戸ノ内遺跡・栗遺跡・清水遺跡などが知られており、これらは低地に立地している。安久東遺跡・戸ノ内遺跡では、前期の竪穴住居跡や方形周溝墓が発見されており、また、栗遺跡では後期の竪穴住居跡が多数発見されている。前期の古墳としては、天神塚古墳が、中期の古墳としては、毘沙門堂古墳や、経ノ塚古墳が、後期の古墳としては、安久諏訪古墳などが知られている。奈良・平安時代の遺跡としては安久東遺跡・清水遺跡・中田畑中遺跡などが知られており、いずれも低地に立地している。清水遺跡では、住居跡などに真北方向に対する指向性が強くなる傾向がみられ、条里制との関連が考えられている。また、中田畑中遺跡では、１辺が1.3mという一般集落とは異なる大きさの掘り方をもつ掘立柱建物跡が４棟発見されている。鎌倉・室町時代の遺跡としては、 自然堤防上に立地する前田館跡・四郎丸館跡・松木遺跡・安久東遺跡などが知られており、松木遺跡や安久東遺跡では掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡などが発見され、豊富な遺物が出土している。また、安久東遺跡では、大規模な溝の存在から、前田館跡との関連が指摘され、前田氏の屋敷跡の可能性が考えられている。また、中世の板碑が数多く分布することも、中田南遺跡周辺の地域の特徴であり、主に鎌倉時代中頃から室町時代中頃にかけて造立された板碑が、柳生地区では36基、名取市では400基以上が確認されている。



0　1　2 km

（国土地理院1/25,000「仙台南西部」「仙台東南部」を複製）

遺　跡　地　名　表

No.	遺跡名	立地	時代
1	富田南西	自然堤防	奈良～平安
2	六本松	自然堤防	奈良～平安
3	松木	自然堤防	奈良～平安・中世・近世
4	雷	自然堤防	平安
5	関場	自然堤防	古墳・奈良～平安
6	雷東	自然堤防	平安
7	谷地田	自然堤防	古墳・奈良～平安
8	栗	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安
9	安久	自然堤防	奈良・平安
10	中田神社裏	自然堤防	古墳・平安
11	安久東	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安・近世
12	上古川	自然堤防	近世以降
13	伊豆野権現古墳	自然堤防	古墳
14	安久諏訪古墳	自然堤防	古墳
15	安久東古墳	自然堤防	古墳
16	前田館跡	自然堤防・背後湿地	中世
17	壇腰	自然堤防	奈良～平安
18	北	自然堤防	奈良～平安
19	**中田南**	**自然堤防**	**縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世**
20	後河原	自然堤防	弥生・平安・中世・近世
21	前沖中	自然堤防	古墳・奈良～平安
22	前沖北	自然堤防	古墳・奈良～平安
23	内手	自然堤防	奈良～平安
24	中田畑中	自然堤防	古墳・奈良～平安
25	大塚山古墳	自然堤防	古墳
26	城丸古墳	自然堤防	古墳
27	戸ノ内Ⅰ	自然堤防	弥生・古墳・奈良～平安・中世
28	戸ノ内Ⅱ	自然堤防	中世
29	岩口上	段丘	古墳・奈良～平安
30	熊野新宮社宿坊跡	沖積錐	中世
31	岩口下	扇状地	古墳・奈良・平安
32	八ツ口	自然堤防	奈良～平安・中世
33	舞台上	自然堤防	奈良～平安
34	土手下	自然堤防	奈良～平安
35	岩口中	扇状地	古墳・奈良～平安
36	岩口南	扇状地	古墳・奈良～平安
37	舞台中	自然堤防	奈良～平安
38	高畑	自然堤防	弥生・古墳・奈良～平安
39	乗馬	自然堤防	奈良～平安
40	窪田	自然堤防	奈良末～平安

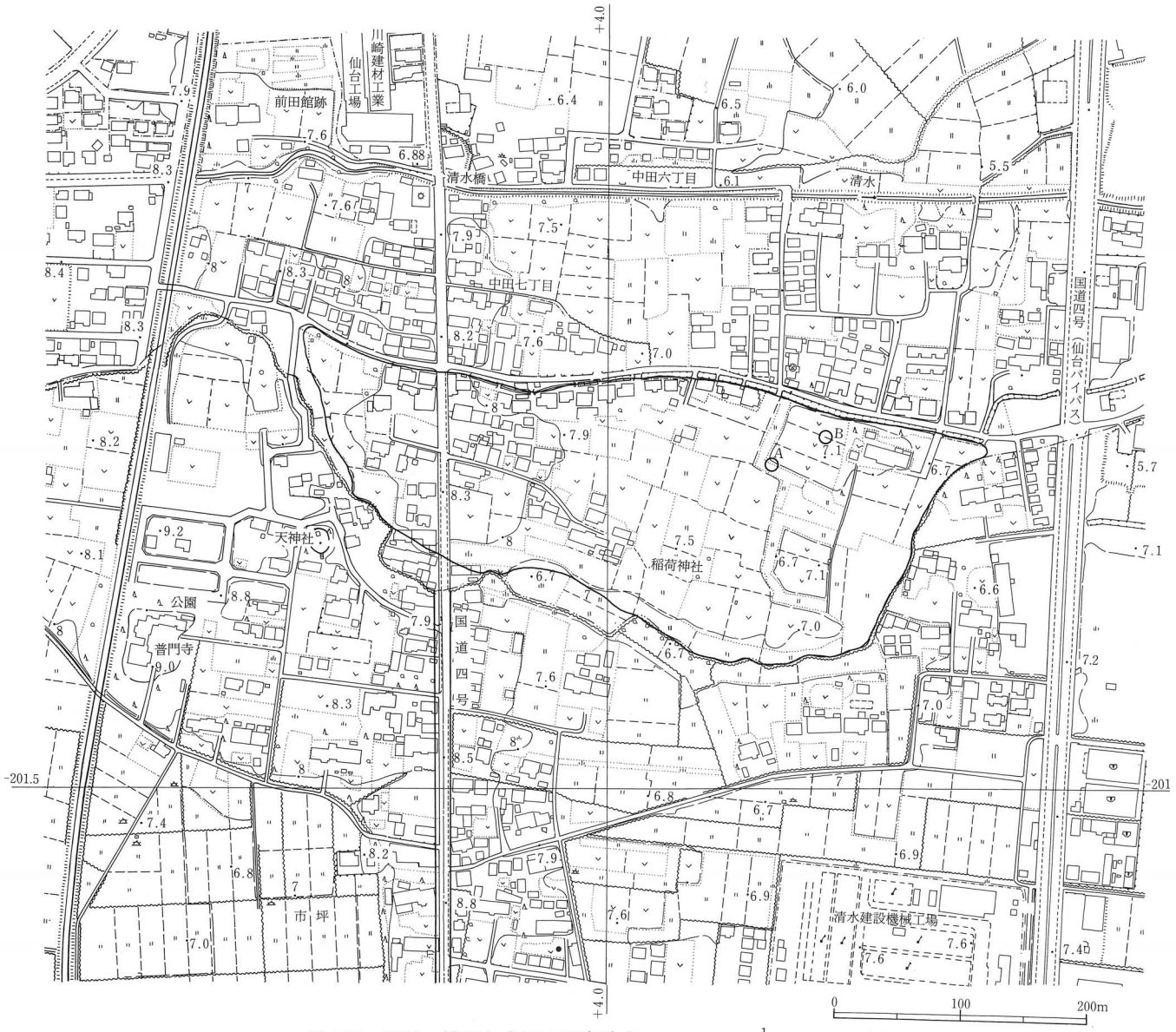
No.	遺跡名	立地	時代
41	北宮神明	自然堤防	奈良～平安
42	鹿野	丘陵端	縄文
43	那智神社宿坊跡	丘陵	中世
44	東真坂	丘陵	縄文（中期）・奈良～平安
45	真坂	沖積錐	縄文（中期・後期）・弥生（中期）・古墳・奈良～平安
46	鹿野東	沖積錐	縄文・弥生・古墳・奈良～平安
47	川上大館跡	丘陵	中世
48	西北畑古墳	沖積錐	古墳（後期）
49	川上	沖積錐	縄文（後期）・弥生（中期）・奈良・平安・中世
50	内館	自然堤防	奈良～平安
51	来光囲	丘陵	縄文（前期）・奈良～平安
52	八反田	後背湿地	弥生
53	桑島館跡	丘陵	中世
54	金剛寺貝塚	丘陵	縄文（前期・後期・晩期）
55	今熊野	丘陵	縄文（前期・後期・晩期）・弥生・古墳・奈良・平安
56	今熊野貝塚	丘陵	縄文（前期）
57	南台窯跡	丘陵斜面	奈良～平安
58	南台西	丘陵	奈良～平安
59	北野横穴墓跡	丘陵斜面	奈良～平安
60	北野窯跡	丘陵斜面	奈良～平安
61	箕輪Ｂ地区古墳群	丘陵	古墳（後期）
62	箕輪Ａ地区古墳群	丘陵	古墳（中期）
63	東内館	自然堤防	古墳（後期）・奈良～平安
64	元中田	自然堤防	弥生・古墳・奈良～平安
65	野来	自然堤防	弥生・奈良～平安
66	原	自然堤防	縄文・弥生・古墳・奈良～平安
67	八幡	自然堤防	古墳（後期）・奈良～平安
68	清水古墳	自然堤防	古墳
69	清水	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安
70	天神塚古墳	自然堤防	古墳
71	西田	自然堤防	奈良～平安
72	上余田	自然堤防	奈良～平安
73	沢目	浜堤	弥生・古墳・奈良～平安
74	下田高南	自然堤防	奈良～平安
75	八王寺屋敷跡	自然堤防	中世
76	下余田	自然堤防	古墳（中期）・奈良～平安
77	飯塚古墳群	自然堤防	古墳（後期）
78	皇壇ヶ原	自然堤防	奈良～平安
79	中北田	自然堤防	奈良～平安

第１図　周辺の遺跡（中田南遺跡は19）

Ⅳ．調査の方法と概要

遺跡の概要：今回の調査は、２次調査にあたる。ここでは、第１次調査の概要についてまとめてみたい。中田南遺跡の第１次調査は、当時登録されていた中田南遺跡内の宅地造成工事に伴う事前調査として平成４年４月14日から平成５年１月19日まで行われた。

約6，900㎡が調査され、調査区のほぼ全域で古代から中世にわたる各種の遺構・遺物が多数発見された。古墳時代中期の遺構としては、土坑１基が検出され、その中から土師器が出土しており、小規模な集落の存在の可能性が考えられている。古墳時代後期の遺構としては、竪穴住居跡３軒などが検出され、その中から土師器・土錘・鉄製品などが出土しており、これらの数軒の竪穴住居跡により、集落が構成されていたことが考えられている。古墳時代末から奈良時代前半の遺構としては、竪穴住居跡23軒、掘立柱建物跡２棟などが検出され、その中から土師器・須恵器・鉄製品などが多数出土している。この時期の遺構群の性格としては、公的な組織との関連で出現した計画的な大集落と考えられており、またその居住者としては、地方官衙に密接な関係をもつ在地有力者層が想定されている。



第２図　遺跡の範囲と今回の調査地点（仙台都市計画図$\frac{1}{2,500}$をトレース・縮小）

平安時代前半の遺構としては竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡などが検出され、その中から、土師器・須恵器・赤焼土器・灰釉陶器・鉄製品などが出土している。この時期の遺構群の性格としては、地方官衙と関わりをもった在地有力者層の集落が想定されている。鎌倉時代の遺構としては、竪穴遺構・井戸跡・溝跡などが検出され、その中からは、陶器・磁器・木製品などが出土している。それらの遺構については村落内の有力な農民層か土豪層の屋敷跡と位置づけられている。室町時代の遺構は、２つの時期から成っている。それぞれ、井戸状遺構・掘立柱建物跡・井戸跡・堀跡・溝跡が検出されており、陶器・磁器・石製品・古銭・木製品などが出土している。各時期とも、その遺構群の性格としては、堀で囲まれた村落内の有力農民層の屋敷跡と考えられている。

今回の調査では、前述したこれまでの調査知見に基づき、集落及び生産域の広がりを確認することを主なねらいとした。

調査の方法： 今回の調査対象面積は約260㎡で、この中に幅員４ｍ道路が東西に２本設定される計画であった。この２本の道路は１次調査の調査範囲内にあるため、１次調査のグリッド基準線をそのまま使用した。東側の南北方向の道路（１次調査Ⅷ区）の中心線を仮の基準線とし、その道路とほぼ直行する６ｍ道路（１次調査Ⅴ区）の中心線との交点を東西方向の基準線Ｎ－0－Ｓとした。そして、実際の南北方向の基準線は、仮の基準線より100m西に移動し、Ｗ－0－Ｅとした。この２本の軸線を基準として調査区全体がかかるように10mメッシュのグリッドを組み、測量基準線を交点から東西・南北方向の距離数で表わすことにした。調査区は、南側をＡ区、北側をＢ区とした。検出された遺構は、Ａ・Ｂ区とも基準杭を中心に全面に水糸で１ｍメッシュを組み、それらを基準線として、作図した。実測図には、遺構平面図と遺構断面図があり、縮尺は1/20を基準とし、細部の表現が必要な場合には1/10とした。

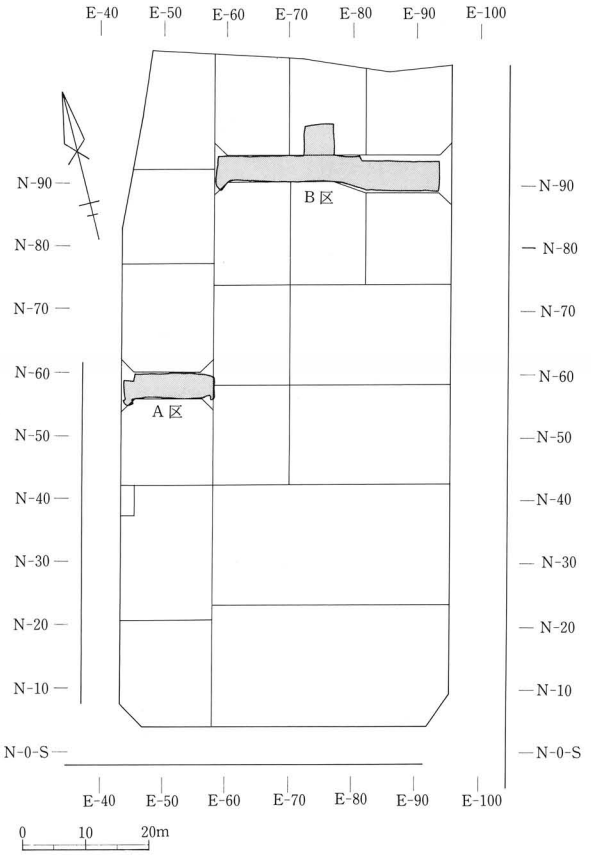
調査の概要： 調査は、平成６年12月１日から、調査員２名、スタッフ10名の体制で開始した。重機により、盛土やⅠ・Ⅱ層の除去を行ない、その後、Ⅲ層から遺構確認作業に移行した。Ａ区では、Ⅲ層は確認されなかった。Ｂ区ではⅢ層が全面に分布しており、そのⅢ層上面での遺構確認に努めたが、最終的にはⅢ層直下の黄褐色土層(Ⅳ層)上面で、遺構の確認を行った。Ａ区では溝跡が確認され、Ｂ区では、一面に小溝状遺構群と多数のピットが確認された。１次調査では、Ｂ区の東側のⅧ区において多数の小溝状遺構が検出されており、Ｂ区の小溝状遺構は、これらと関連があるものと思われた。

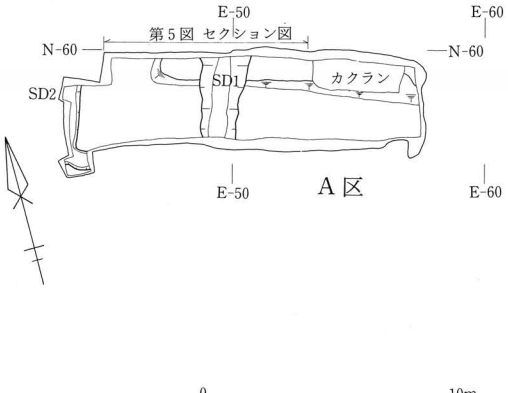
Ａ区の遺構確認後、調査区に正式な基準杭を設け、Ａ区の精査を開始し、Ａ区調査終了後、Ｂ区も同様に調査を進めた。Ａ区、Ｂ区とも検出された遺構は、次の通りである。

Ａ区：溝跡２条

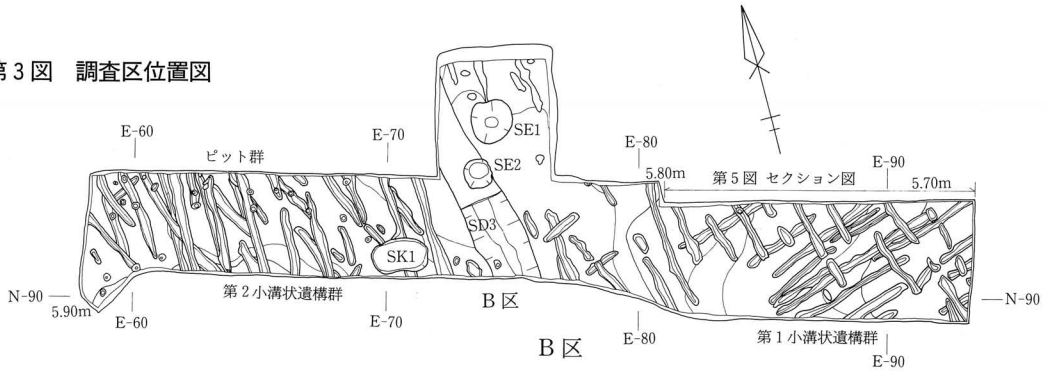
Ｂ区：柱穴列１条・ピット群１群・井戸跡２基・土坑１基・溝跡１条・小溝状遺構群２群

これらの中で、ピットと小溝状遺構群については、平面的なまとまとりを群としてとらえている。柱穴については、調査中に組み合うピットの検討を行ない、堆積土の状況、ピット間隔などから、一条の柱穴列を把えた。Ｂ区の精査と併行して、Ⅳ層以下の下層調査、基本層序の断面図作成などを行ない、12月22日に一切の調査を終了した。





第3図　調査区位置図



第4図　A区・B区遺構配置図

V．基本層序

今回の調査対象面積は約260㎡で、全域が自然堤防上に立地している。A・B区とも、1次調査の基本層序と共通していることから、1次調査の基本層序と同じ層名にした。

【Ⅰ層】：最近までの耕作土である。主に、暗褐色（10ＹＲ3/3）のシルト及び粘土で構成される層で、層厚は10～30cmであり、層中からは、各時代の遺物が出土している。

【Ⅱ層】：主に暗褐色（10ＹＲ3/3）のシルト及び粘土で構成され、層厚は10cm前後、厚い箇所で20cmであり、途中で切れる箇所もあった。

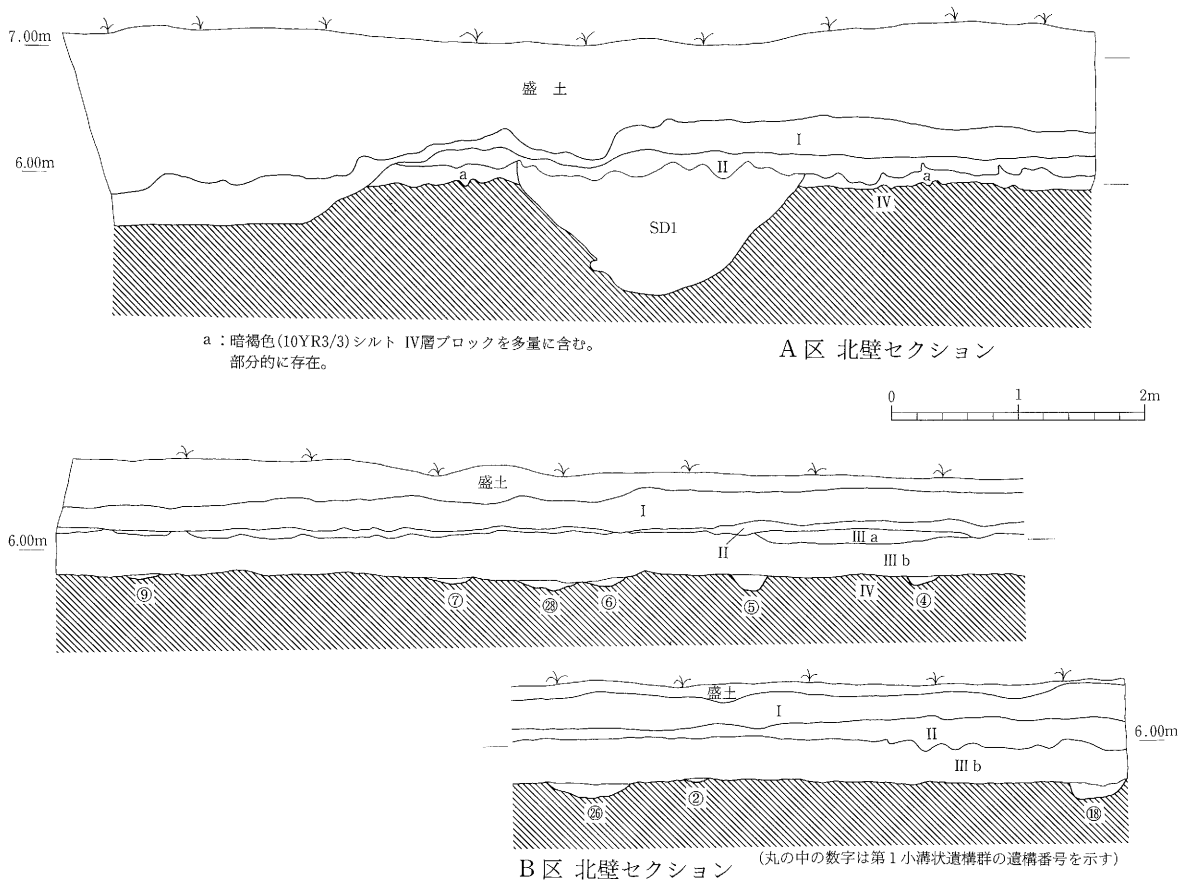
【Ⅲａ層】：主に暗褐色（10ＹＲ3/3）のシルト及び砂質シルトで構成される層で、層厚は10cm前後で部分的に分布する。中世に属する遺構の中で、この層上面から掘り込まれている例が確認されており、1次調査でも同様の例が確

認された。

【Ⅲｂ層】：主に暗褐色（10ＹＲ3/2）のシルト及び砂質シルトで構成される層で、層厚は30～40㎝で、Ａ区では確認されなかった。

【Ⅳ層】：主に褐色（10ＹＲ4/4）の粘土質シルトで構成される層である。また、Ⅳ層以下の層序については、Ⅳ層の細分層として把えた。Ⅳ層については標高3.87m まで掘り下げて特徴を把握した。その結果、細分層として５層（ａ～ｅ層）を確認することができた。層厚はそれぞれ異っており、大まかに把えると、砂・シルト・粘土の互層となっている。ａ層はシルト質粘土層で、厚さ約５㎝の帯状の酸化鉄斑紋の集積が層中にみられた。標高4.60m 前後のｃ層から下層ではグライ化が進行する。また、ｄ層は黄灰色の粘土質シルト層であり、層中には植物遺体が少量含まれていた。

上述のⅠ～Ⅲ層の傾斜は、Ⅳ層上面の傾斜と同傾向を示しており、Ｂ区では、東端で5.7m、西端で5.9m であり、東側へわずかに傾斜している。最大の比高差は、Ｂ区で20㎝前後となっている。



第５図　基本層序

Ⅵ　発見された遺構と出土遺物

１．柱穴列とピット群

Ｂ区西半部のⅣ層上面でピットが多数確認された。なお、Ｂ区東半部ではピットが１個確認されたにすぎない。

また、B区西半部では、調査区の北壁寄りにピットが多く、南壁ではその密度が薄れる傾向がうかがわれる。いずれも、小溝状遺構と第3溝跡（ＳＤ3）を切っており、これらよりも新しい。

全部で26個のピットが検出され、その中で柱痕跡が確認されたのは、15個である。ピットは、全体的に規模が小さく、径が17～37cm、深さが13～41cmで、平面形は円形が多い。柱痕跡の平面形は、円形が多く、径9～22cmであった。掘り方の埋土を見ると、いずれも黒褐色で、Ⅳ層ブロックを多量に含んでいた。柱痕跡の堆積土は、15個のピットのうち10個は、Ⅳ層ブロックを少量含んでいた。Ⅳ層ブロックを含まない5個のピットの多くは後述する柱穴列のピットであった。

建物跡は確認されなかったが、その配置から一連のピットと考えられる柱穴列が一列認められた。それは4個のピットからなり、直線状にほぼ等間隔に並んでいる。柱穴列は、N-93.6°-Eの方向で、長さが4.80mを計る。それぞれの柱間は1.60m前後で、建物の一部か、区画のための柱列と推定される。もし、建物跡の一部であれば、調査区の北側でこれらに組み合うピットが検出される可能性が考えられる。

いずれのピット内からも出土遺物はなかった。

2．井戸跡

（1）第1井戸跡（ＳＥ1）

【位置】　B区　　N-96.1～98.0　　E-73.0～75.0

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認され、全体が検出された。壁の中位部分は、崩落により大きく剝落している。小溝状遺構群と重複しており、これよりも新しい。

【平面形・規模】素掘りの井戸である。平面形はわずかに南北に長いが、ほぼ円形をなしている。規模は長軸1.76m、短軸1.64m、深さは2.24mである。

【堆積土】9層確認された。いずれも自然堆積層と考えられる。中には炭化物・焼土粒を含む層や、層中に酸化鉄斑紋・マンガン粒が集積する層も確認された。

【壁・底面】上半部は、外に向かって大きく開いている。下半部は、崩落のため大きく剝落しているが、ほぼ円筒形をなしており、壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がっている。底面は平坦に近く、Ⅳ層の細砂の層まで掘り込まれている。

【出土遺物】堆積土中から35点の遺物が出土した。その中で図示できたのは、陶器7点、土師質土器2点、木製品2点、磨面をもつ礫7点である。陶器には、常滑の甕の体部破片1点と、在地産とみられる鉢1点、甕3点、壺1点、大甕1点が出土している。土師質土器は、皿1点、鉢1点で、2点とも、調整はロクロナデ(内外面）で、皿の底部切り離しは、回転糸切りによるものである。木製品は、2点とも、つけ木の可能性が考えられるもので、先端に焦痕のあるものである。

（2）第2井戸跡（ＳＥ2）

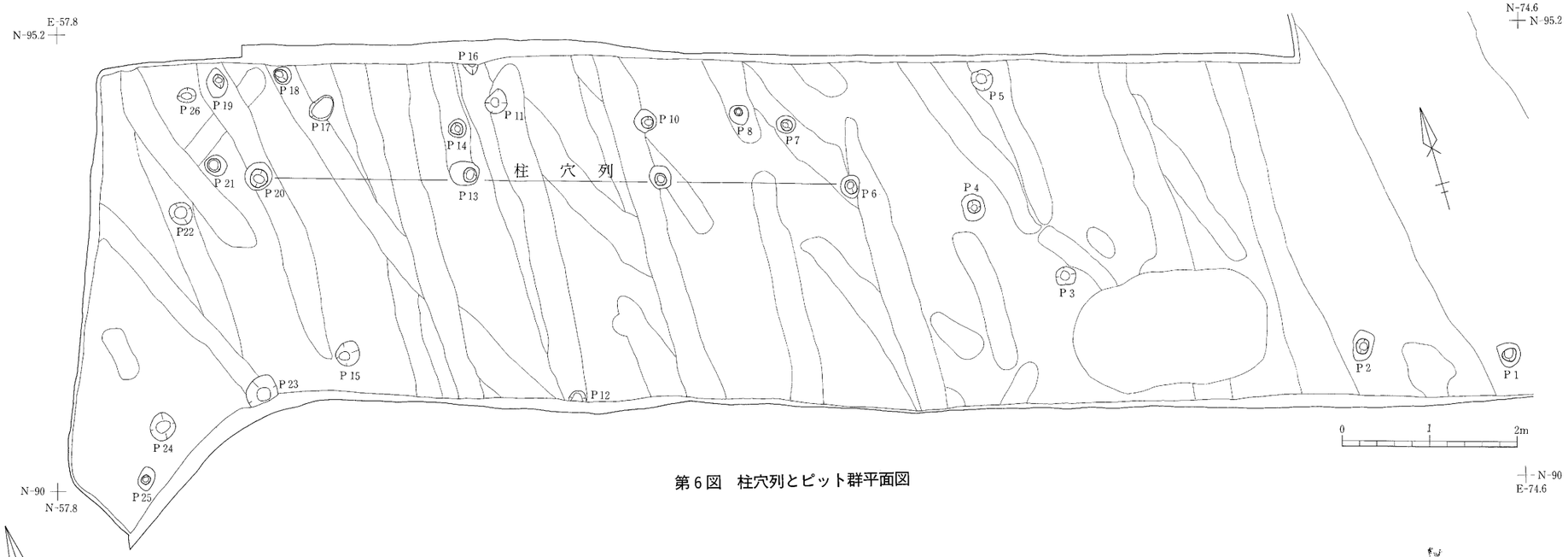
【位置】　B区　　N-94.4～95.6　　E-73.1～74.2

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認され、全体が検出された。第3溝跡（ＳＤ3）と重複しており、これよりも新しい。

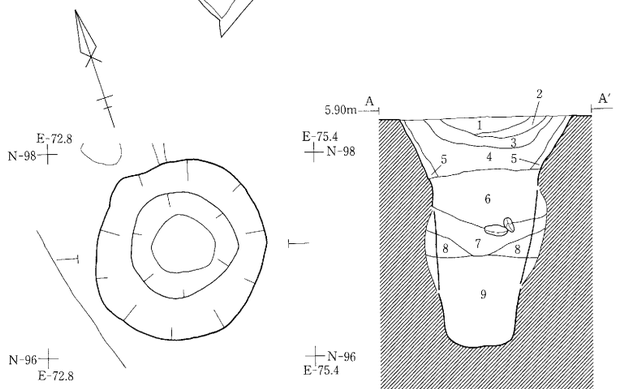
【平面形・規模】素掘りの井戸である。平面形は、やや南北に長いが、ほぼ円形をなしている。規模は、長軸1.14m、短軸1.00m、深さ1.66mである。

【堆積土】5層確認された。1層は人為堆積層、2層以下は自然堆積層と考えられる。炭化物を少量含む層も確認された。底面に近づくにつれ、土性は細砂や粗砂を含む層になり、底面付近には5cm程の厚さで粗砂が堆積していた。

【壁・底面】上部はやや外に向かって開いている。下部は崩落のため剝落しているが、ほぼ円筒形をなしており、壁

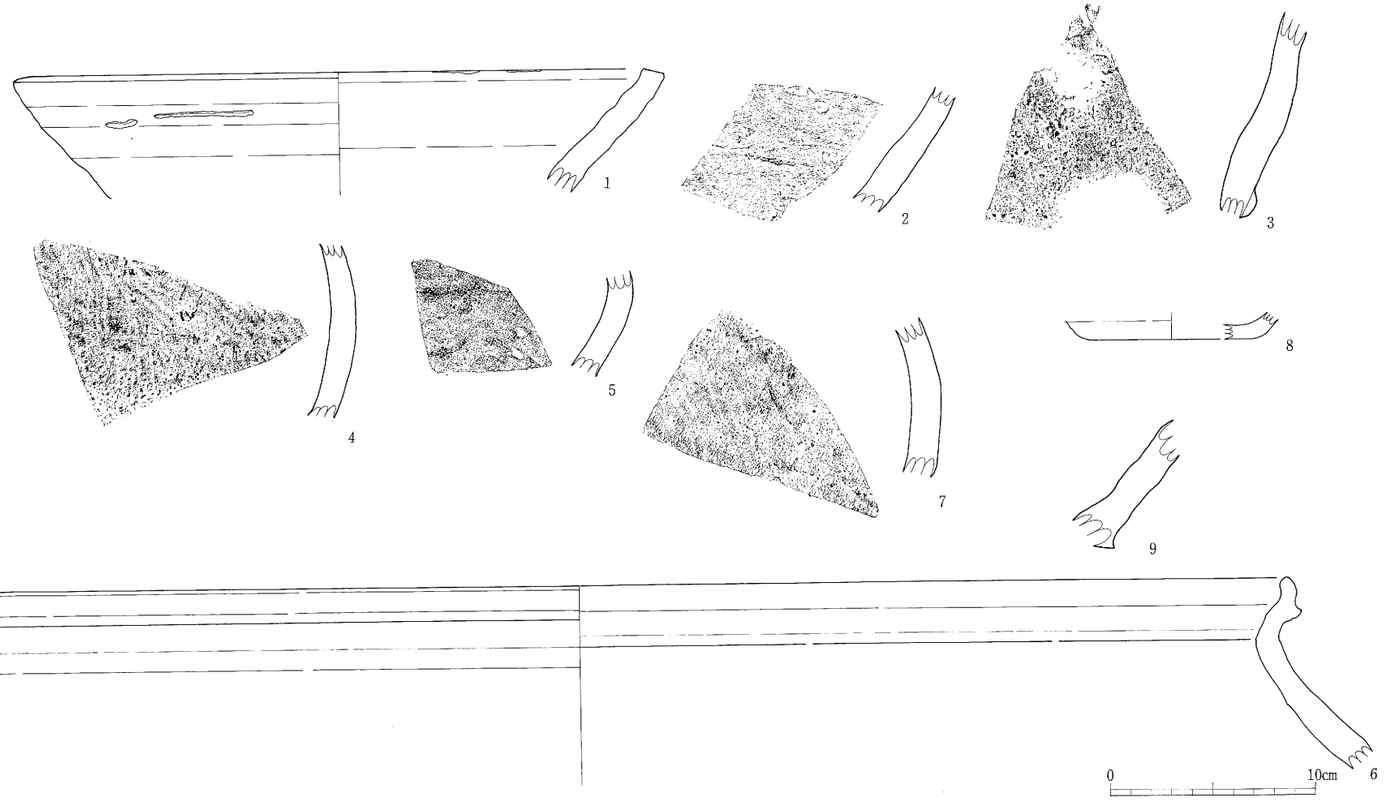


第６図　柱穴列とピット群平面図



第１井戸跡平面図

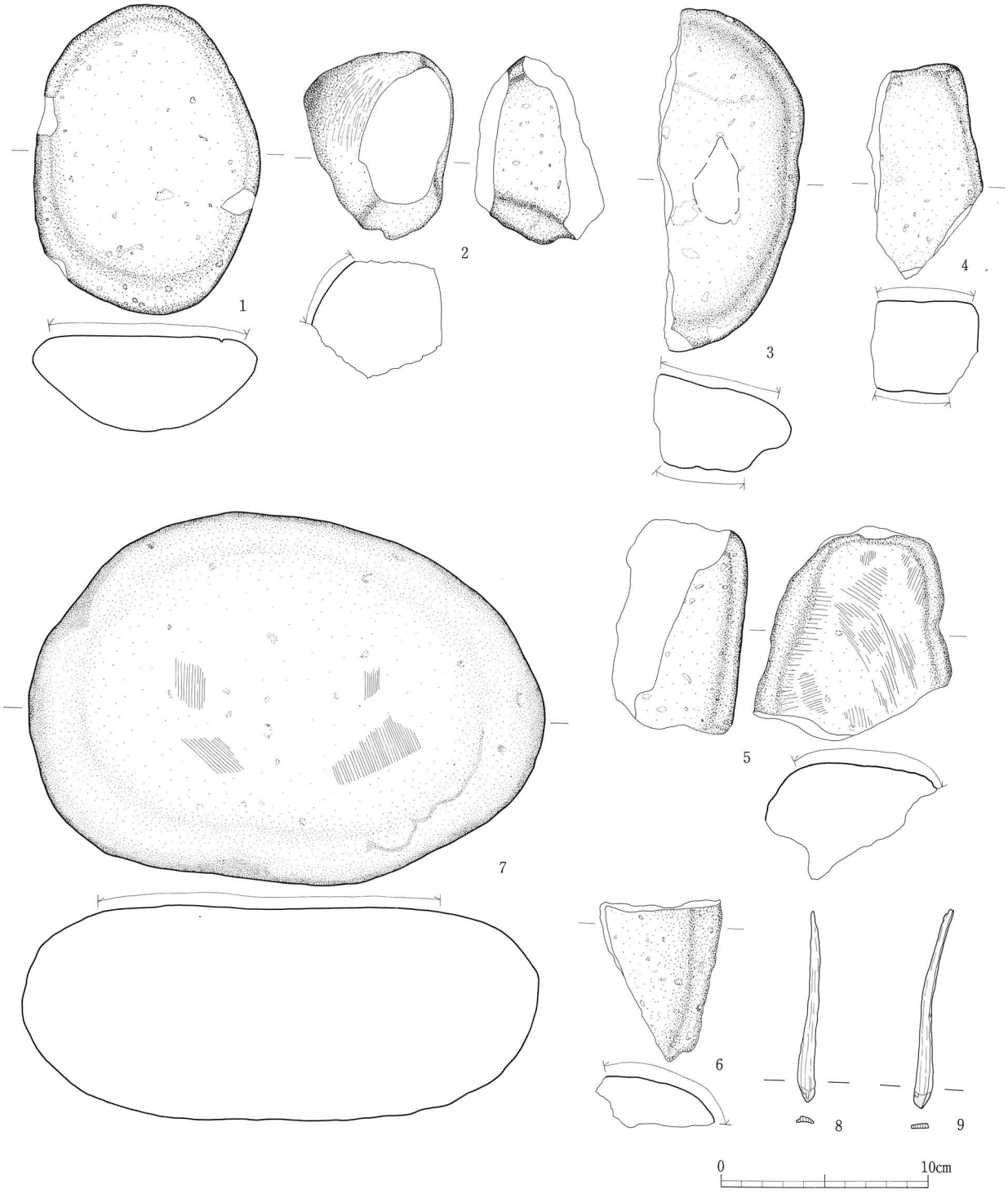
断面図



第７図　第１井戸跡と出土遺物（１）

第７図　第１井戸跡（堆積土）

層No.	土　色	土　性	粘　性	しまり	備　考	遺物層位
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト質粘土	ややあり	あり	炭化物・焼土粒・Ⅳ層小ブロックをわずかに含む。	1
2	黒褐色(10YR2/3)	シルト質粘土	ややあり	ややあり	Ⅳ層粒子を全体的に多量に含む。	
3	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト質粘土	ややあり	あり	10YR2/1黒色ブロックを全体的に混在する。炭化物をわずかに含む。	2
4	黒褐色(10YR2/2)	シルト質粘土	ややあり	ややあり	炭化物・焼土粒を少量含む。下面付近に酸化鉄斑紋・マンガン粒集積。	3
5	黒褐色(10YR2/2)	シルト質粘土	ややあり	あり	Ⅳ層の大・小ブロックを多く含む。	
6	黒褐色(10YR2/2)	粘土	あり	なし	Ⅳ層の細かなブロックと粒子が全体的に混じる。層の下部からグラ化。自然木片・燻子出土。	4
7	黒　色(2.5Y2/1)	粘土	あり	なし	Ⅳ層ブロック粒子を全体的に多く含む。縞状をなすところもみられる。	5
8	暗灰黄色(2.5Y5/2)	粘土	あり	なし	Ⅳ層崩落土。	
9	オリーブ黒色(5Y3/1)	粘土	あり	なし	Ⅳ層ブロック粒子が全体的にまばらに混じる。	6



第８図　第１井戸跡の出土遺物（２）

ピットNo. / 項目	P1		P2		P3	P4		P5	P6		P7		P8		P9	
	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡		掘り方	柱痕跡		掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形　状	略円形	円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形
大きさ(cm)	28×24	16×15	34×23	17×15	23×21	30×25	15×15	24×24	25×22	16×14	22×22	13×13	22×22	9×9	26×24	14×14
深　さ(cm)		41		18.5	17.5		18	19		18		13		22		39.5
堆積土	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	暗褐色 10YR3/4	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3

ピットNo. / 項目	P10		P11	P12	P13		P14		P15	P16	P17	P18		P19	
	掘り方	柱痕跡			掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡				掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形　状	円形	円形	楕円形	(円形)	楕円形	円形	円形	円形	円形	楕円形	楕円形	円形	円形	(楕円形)	楕円形
大きさ(cm)	26×26	14×14	28×26	20×(12)	35×25	16×16	21×20	14×14	28×28	17×(12)	32×23	20×18	16×14	33×(23)	17×13
深　さ(cm)		不明	17.5	19.5		36.5		34.5	36.5	21	18		32		40
堆積土	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3

ピットNo. / 項目	P20		P21		P22	P23	P24	P25		P26
	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡				掘り方	柱痕跡	
形　状	円形	円形	円形	円形	円形	(円形)	円形	楕円形	円形	楕円形
大きさ(cm)	32×31	22×21	26×24	15×15	25×24	37×(27)	32×29	26×19	11×10	22×17
深　さ(cm)		34		28.5	10.5	22.5	33		26	17.5
堆積土	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	暗褐色 10YR3/4	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/3	暗褐色 10YR3/4

ピット群註記表

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
第7図 1	陶器 鉢	1層	無釉。色調－内・外面（極暗赤褐）。外面口縁部、内面端部に重ね焼き痕あり。内・外面ともロクロナデ。	在地	中世	口縁～体部 1/5	29.8	－	－	11－11	I－2
第7図 2	陶器 甕	3層	無釉。色調－外面（極暗赤褐）、内面（暗赤）。胎土に細砂を多く含む。外面－ケズリ、内面－ナデ。	在地	中世	体部破片	－	－	－	11－8	I－3
第7図 3	陶器 甕	4層	無釉。色調－外面(緑黒)、内面(黒)。胎土に細砂を多く含む。外面－ケズリ、内面－ナデ。	常滑	中世	体部破片	－	－	－	11－9	I－4
第7図 4	陶器 甕	4層	無釉。色調－外面（緑灰）、内面（暗赤褐）。胎土に細砂を多く含む。外面－ケズリ、内面－ナデ。	在地	中世	体部破片	－	－	－	11－10	I－5
第7図 5	陶器 壺	4層	無釉。色調－外面（極暗赤褐）、内面（赤）。胎土に細砂を多く含む。外面－ケズリ・ナデ、内面－ナデ。	在地	中世	体部破片	－	－	－	－	I－6
第7図 6	陶器 大甕	5層	無釉。色調－外面（暗赤褐）、内面（暗赤）。胎土に細砂を多く含む。外面－口縁部ヨコナデ。内面－ナデ。	在地 白石窯	13C後半 ～14C前半	口縁～体部 1/20	69.0	－	－	12－4	I－7・8
第7図 7	陶器 甕	6層	無釉。色調－外面（灰オリーブ）、内面（暗赤褐）。胎土に細砂を多く含む。外面－ヘラナデ、内面－ナデ。	在地	中世	体部破片	－	－	－	12－1	I－9
第7図 8	土師質土器 皿	2層	色調－内・外面（黄橙）。底部－回転糸切り。内・外面ともロクロナデ。	－	13C後半 ～14C前半	体部～底部 1/4	－	8.0	－	11－6	I－13
第7図 9	土師質土器 鉢	3層	無釉。色調－内・外面（橙）。内・外面ともロクロナデ。	在地	13C後半 ～14C前半	底部破片	－	－	－	11－7	I－14

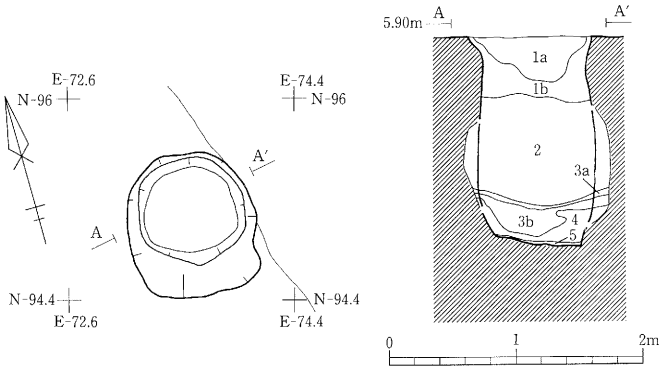
番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
第8図 1	磨面をもつ礫	1層	偏平な礫を利用。一面に磨面が認められる。	15.0	10.9	4.6	980	凝灰岩質安山岩？	13－1	K－3
第8図 2	磨面をもつ礫	1層	円棒状の礫を利用。磨面が2ヶ所に認められる。一部のみ。擦痕が認められる。	(9.1)	(6.3)	(6.5)	(425)	凝灰岩質安山岩？	12－6	K－4
第8図 3	磨面をもつ礫	1層	円棒状の礫を利用。一部破損。上部にスス状の黒い付着物あり。上面に削面あり。磨面が2ヶ所に認められる。	16.6	(6.9)	4.6	(530)	凝灰岩質安山岩？	13-2	K－5
第8図 4	磨面をもつ礫	3層	偏平な礫を利用。一部破損。上面に擦痕あり。磨面は2面に認められる。	(10.4)	(9.6)	(5.6)	(650)	凝灰岩質安山岩？	12－7	K－6
第8図 5	磨面をもつ礫	3層	円棒状の礫を利用。一部のみ。下部にスス状の黒い付着物あり。磨面は2ヶ所に認められる。	(10.5)	(5.6)	(4.4)	(370)	凝灰岩質安山岩？	13－3	K－7
第8図 6	磨面をもつ礫	3層	残存はわずかである。磨面は一面に認められる。	(7.9)	(5.9)	(2.5)	(150)	凝灰岩質安山岩？	13－4	K－8
第8図 7	磨面をもつ礫	4層	偏平な礫を利用。上面の中央部が黒褐色に変色。片面の中央部と上側面にスス状の黒い付着物あり。磨面は一面に認められる。	18.1	25.0	10.3	6000	凝灰岩質安山岩？	13－5	K－9

番号	種別	層位	特徴	樹種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	写真図版	登録番号
第8図 8	木製品 つけ木？	6層	完形。上部が細く、中央部から下部にかけて太い。断面は長方形に近い。先端に焦痕あり。	マツ属複維管束亜属の一種	9.3	0.8	0.3	14－1	L－1
第8図 9	木製品 つけ木？	6層	完形。上部が細く、中央部から下部にかけて太い。断面は長方形。先端に焦痕あり。	マツ属複維管束亜属の一種	9.7	0.8	0.2	14－2	L－2

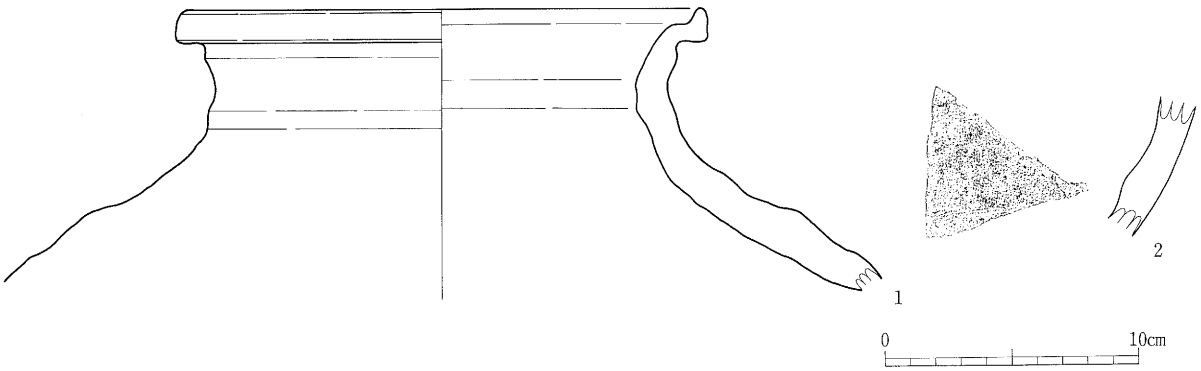
第1井戸跡出土遺物観察表

は底面から垂直に立ち上がっている。底面は平坦に近く、IV層の粘土層まで掘り込まれている。

【出土遺物】堆積土中から16点の遺物が出土した。その中で図示できたのは陶器２点であり、常滑の壺の口縁部破片と在地とみられる甕である。木製品は、曲物の側板が３点、曲物の底板が１点、不明木製品１点、木材片１点である。

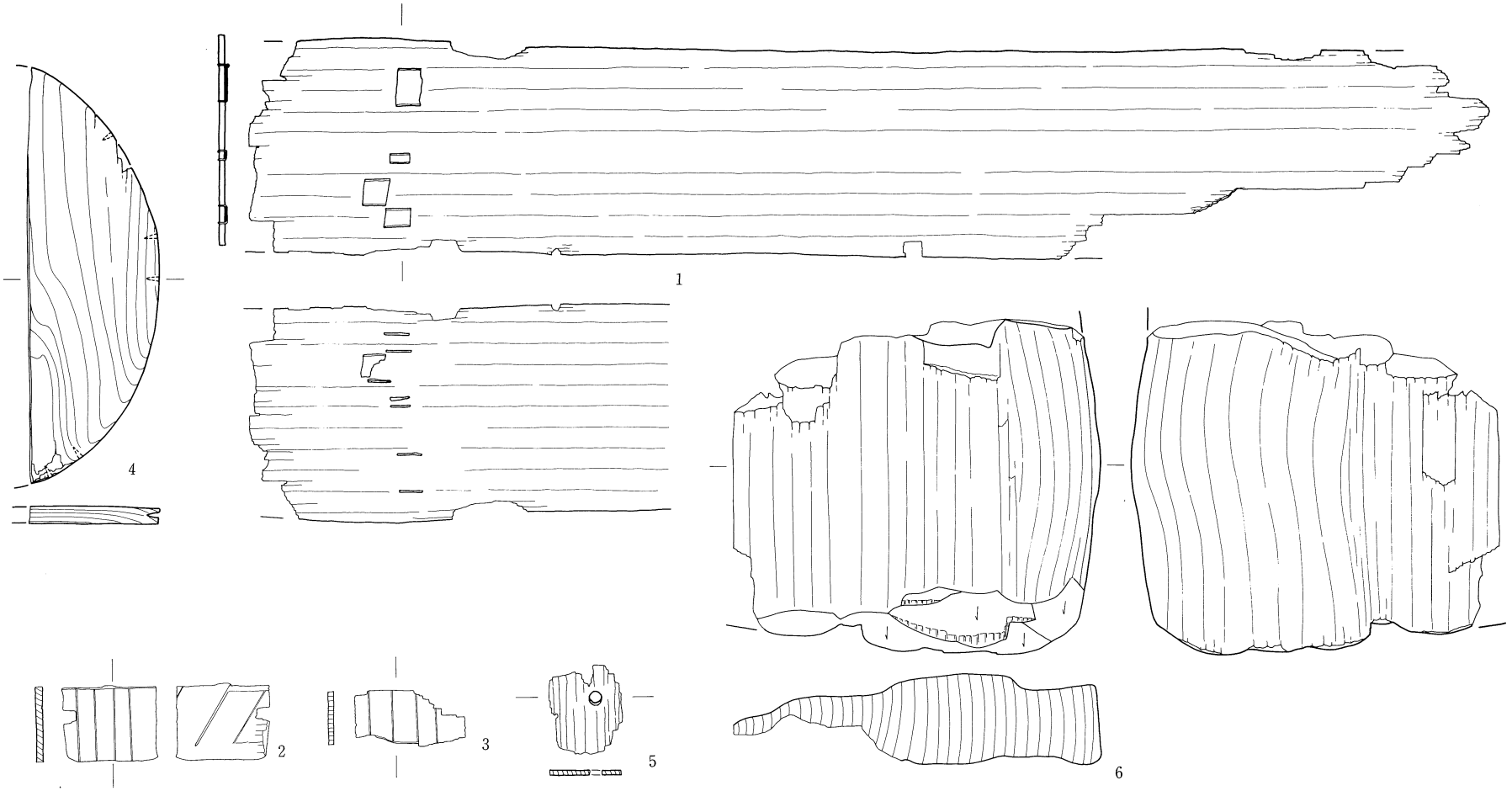


層No	土色	土性	粘性	しまり	備考	遺物層位
1a	にぶい黄褐色 10YR5/4	粘土質シルト シルト	あり	あり	IV層ブロックからなる。人為堆積。	1
1b	黒褐色 10YR2/2	シルト 質粘土	あり	なし	IV層ブロック混在。人為堆積。	
2	黒褐色 10YR2/2	粘土	あり	なし	IV層粒子全体的に混じる。炭化物少量含む。自然木片・種子出土。	2
3a	黒褐色 10YR2/2	粘土質シルト	あり	なし	層中に３b層ブロック混在。自然木片・曲物出土。	3
3b	にぶい黄橙色 10YR7/4	シルト	あり	なし	層中に細砂を少量含む。３a層のブロック混在。	
4	灰色 5Y6/1	シルト	あり	なし	層中に細砂を多量に含む。グライ化。	
5	灰色 5Y5/1	粗砂	なし	なし	底面に５cm程の厚さで粗砂が堆積。	4

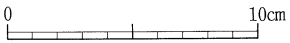


番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	陶器 壺	2層	無釉。色調－内・外面(黒褐)。口縁部に焼けひずみあり。口縁部 内・外面－ロクロナデ、体部 内面－オサエ。	常滑	13C前半	口縁～体部 1/3	20.4	－	－	11－13	I－10
2	陶器 甕	底面	無釉。色調－内・外面(褐灰)。胎土に細砂を多く含む。外面－ケズリ。内面－ナデ。	在地	中世	体部破片	－	－	－	11－12	I－11

第９図　第２井戸跡と出土遺物（１）



番号	種別	層位	特徴	樹種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	写真図版	登録番号
1	曲物　側板	2層	両端欠損。上・下端は残存。一部にとじ皮が認められる。	アナスロ	(59.0)	10.3	0.3	14－4	L－3
2	曲物　側板	3層	内面に罫引きあり。外面にも罫引きあり。	スギ	(4.4)	(3.6)	0.35	14－6	L－4
3	曲物　側板	3層	内面に罫引きあり。	スギ	(4.2)	(2.5)	0.25	14－7	L－5
4	曲物　底板	3層	ほぼ半欠。板目材。側面に径2㎜、長さ6㎜の木針穴が5ヶ所あり。	スギ	(19.7)	(6.2)	0.8	14－5	L－6
5	不明木製品	2層	一部欠損。直径6㎎の穴あり。	アスナロ類似種	(4.2)	(3.4)	0.25	14－8	L－7
6	木材片	2層	一端部に加工あり。	アスナロ類似種	(15.9)	(17.4)	4.2	14－3	L－8



第10図　第2井戸跡の出土遺物（2）

3．土　　坑

（1）第1土坑（ＳＫ１）

【位置】　B区　　N-91.0～92.4　　E-69.4～71.7

【確認面・重複】IV層上面で確認された。第2小溝状遺構群（No.2・No.11）と、重複しており、それよりも新しい。

【平面形・方向・規模】平面形は、東西に長い楕円形をなす。長軸方向は、真北方向とほぼ直交し、N-85°-Wである。規模は、長軸が2.24m、短軸が1.30m、深さは14cmである。

【堆積土】1層認められた。自然堆積層で、IV層小ブロックを多量に含む。少量であるが、炭化物・焼土粒も確認された。

【壁・底面】断面は皿状をなし、底面は起伏が著しい。壁は、底面からゆるやかに立ち上がる。

【出土遺物】出土していない。

4．溝　　跡

（1）第1溝跡（ＳＤ１）

【位置】　A区　　N-56.4～59.8　　E-48.6～50.7

【確認面・重複】IV層上面で確認されたが、断面観察により、IV層上面に部分的に存在する暗褐色シルト層から掘り込まれていることがわかった。北と南は、さらに調査区外に延びている。重複はない。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行する。方向は、真北方向よりやや東に寄っており、N-20°-Eである。確認された長さは3.32mで、最大で、上端幅1.96m、下端幅73cm、深さ75.5cmである。

【堆積土】4層認められ、1・3・4層は自然堆積層、2層は、IV層ブロックが混在する人為堆積層である。1・3・4層はシルト主体の層で、3・4層は壁からの崩落土とみられる層である。2層は粘土およびシルト主体の層で、底面から40cm上位で酸化鉄の斑紋が確認された。

【壁・底面】断面は「U」字形をなしており、壁は底面からゆるやかに立ち上がり、途中で不規則な段をもち、その上方で大きく外傾する。底面は、やや起伏が見られるが平坦であり、全体の傾斜はわずかに西から東の方向に下がっている。

【出土遺物】図示できるものはないが、土師器破片1点、礫2点が出土している。

（2）第2溝跡（ＳＤ２）

【位置】　A区　　N-54.9～58.9　　E-43.2～44.5

【確認面・重複】IV層上面で確認された。重複はない。

【方向・規模】ほぼ直線的に南北に走行し、調査区の南壁付近で東の方向に屈曲し、「L」字形をなす。方向は南北方向が真北から東に寄っており、N-21°-Eで、東西方向はそれとほぼ直交し、N-68°-Wである。確認された長さは南北が2.60m、東西が1.00mであり、規模は、最大で上端幅70cm、下端幅56cm、深さ21cmである。

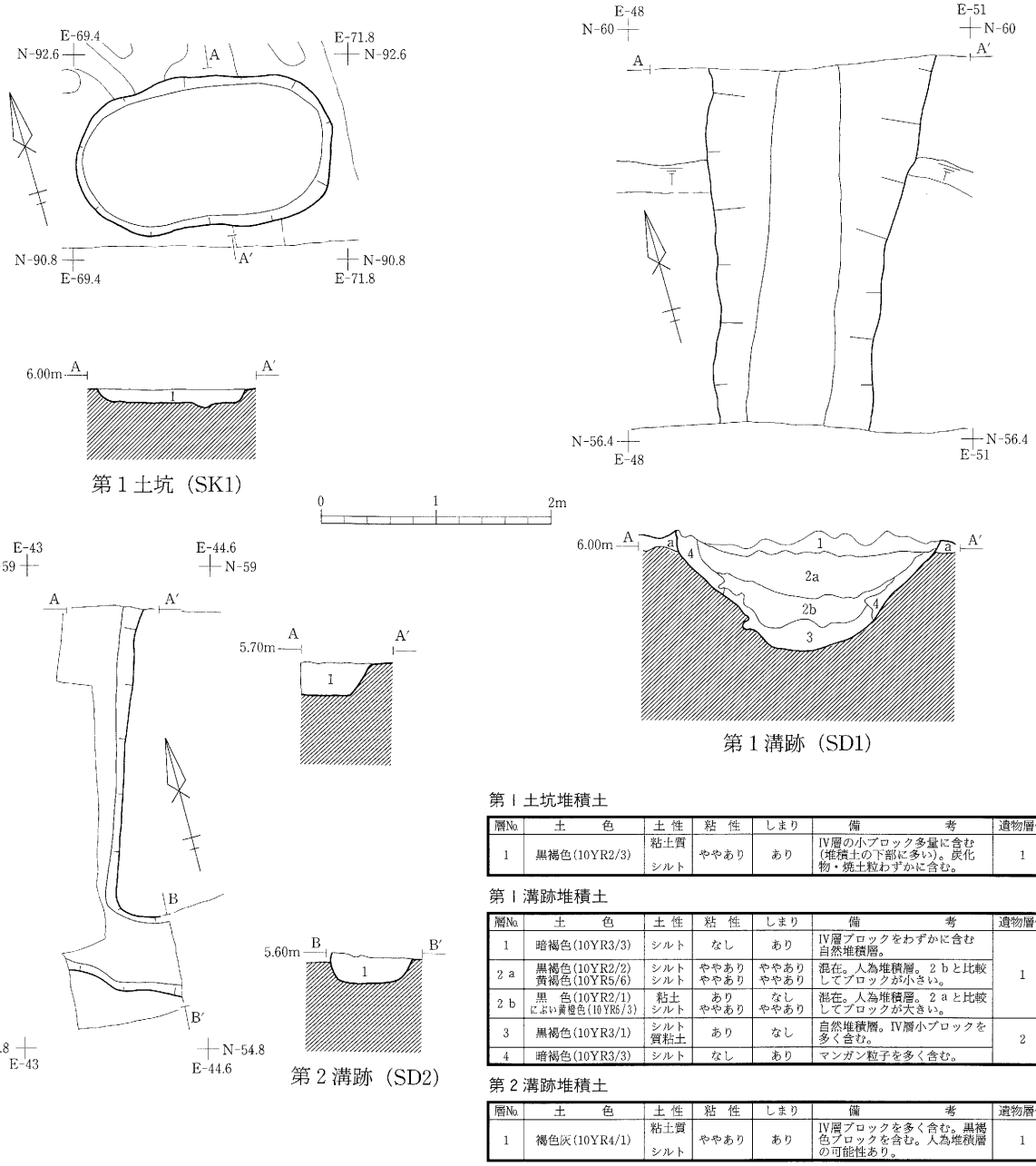
【堆積土】1層のみ認められた。IV層ブロックを多く含んでおり、人為堆積層の可能性が考えられる。

【壁・底面】断面は「U」字形か逆台形をなしており、壁は底面からやや角ばって立ち上がり、その上方で外傾する。底面はほぼ平坦であり、全体の傾斜は南から北に下がっている。

【出土遺物】出土していない。

（3）第3溝跡（ＳＤ３）

【位置】　B区　　N-90.8～98.8　　E-72.0～76.2



第Ⅰ土坑堆積土

層No.	土色	土性	粘性	しまり	備考	遺物層位
1	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト	ややあり	あり	Ⅳ層の小ブロック多量に含む(堆積土の下部に多い)。炭化物・焼土粒わずかに含む。	1

第Ⅰ溝跡堆積土

層No.	土色	土性	粘性	しまり	備考	遺物層位
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	なし	あり	Ⅳ層ブロックをわずかに含む自然堆積層。	1
2a	黒褐色(10YR2/2) 黄褐色(10YR5/6)	シルト シルト	ややあり ややあり	ややあり ややあり	混在。人為堆積層。2bと比較してブロックが小さい。	
2b	黒色(10YR2/1) にぶい黄橙色(10YR6/3)	粘土 シルト	あり ややあり	なし ややあり	混在。人為堆積層。2aと比較してブロックが大きい。	
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土	あり	なし	自然堆積層。Ⅳ層小ブロックを多く含む。	2
4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	なし	あり	マンガン粒子を多く含む。	

第２溝跡堆積土

層No.	土色	土性	粘性	しまり	備考	遺物層位
1	褐色灰(10YR4/1)	粘土質シルト	ややあり	あり	Ⅳ層ブロックを多く含む。黒褐色ブロックを含む。人為堆積層の可能性あり。	1

第11図　土坑・溝跡

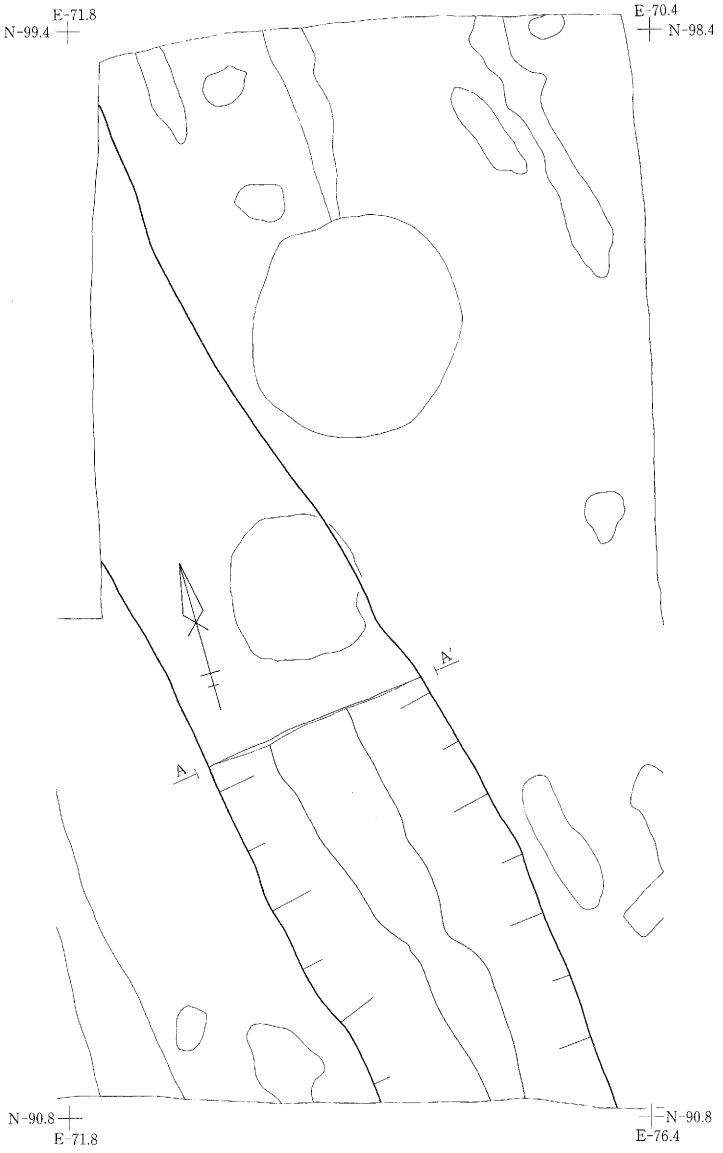
【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。第２井戸跡（ＳＥ２）、ピットと重複しており、これらよりも古い。

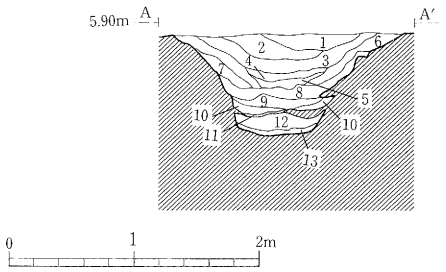
【方向・規模】ほぼ直線的に走行し、方向は真北方向より西に寄っており、N-12°-Wである。確認された長さは8.92mであるが、その南半部のみ完掘した。規模は、最大で上端幅1.93m、下端幅68cm、深さ82cmである。

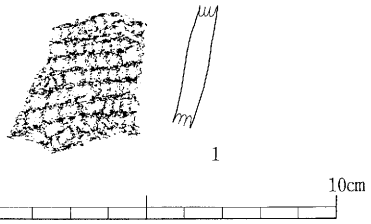
【堆積土】13層認められ、いずれも自然堆積層で、レンズ状に堆積している。堆積層は、１～４層はシルト質粘土主体、５～７層は粘土主体、８層以下は粘土および砂の互層である。５層は腐植層を含み、９・10・12層は水成堆積層と考えられる。12・13層は水流による浸食で底面が削られた部分の堆積層の可能性が考えられる。

【壁・底面】断面は下部が逆台形をなしており、壁は底面から急激に立ち上がり、壁中位で屈曲し、その上方は大きく外傾する。底面は、ほぼ平坦であり、全体的な傾斜はわずかに南から北に下がっている。

【出土遺物】図示できたのは、縄文土器（深鉢）の破片１点のみであるが、図示した遺物の他に、土師器破片が数点出土している。







層No	土色	土性	粘性	しまり	備考	遺物層位
1	黒褐色(7.5Y2/2)	シルト質粘土	ややあり	あり	Ⅳ層ブロックをわずかに含む。	1
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト質粘土	ややあり	あり	Ⅳ層ブロックをわずかに含む。	
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	ややあり	ややあり	Ⅳ層粒子を多量に含む。	2
4	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト質粘土	ややあり	ややあり	Ⅳ層崩落土。	
5	黒色(10YR2/1)	粘土	あり	なし	腐植層。	
6	暗褐色(10YR3/3)	粘土	あり	ややあり	Ⅳ層のブロック粒子を多量に含む。	3
7	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘土	あり	あり	Ⅳ層の崩落土。	
8	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	ややあり	ややあり	Ⅳ層粒子を多量に含む。黄褐色の薄い層を数枚含む。	
9	黒褐色(7.5YR3/2)	粗砂	なし	ややあり	水成堆積と考えられる。	
10	暗褐色(7.5YR3/2)	細砂	なし	ややあり	水成堆積と考えられる。	
11	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土	あり	あり		
12	褐色(10YR4/4)	細砂	なし	あり	水成堆積と考えられる。	
13	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土	あり	ややあり	黄橙色の薄い層と互層をなす。	

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	縄文土器 深鉢	3層	外面－LR縄文、内面－ヘラミガキ。胎土に細砂を多量に含む。	体部破片	－	－	－	11－1	A－1

第12図　第３溝跡と出土遺物

５．小溝状遺構群

（１）第１小溝状遺構群（Ｂ区東半部）

【位置】　Ｂ区　　N-89.1～99.4　　E-72.1～93.4

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。小溝状遺構群の一部の検出とみられ、主に、北・南・東の調査区外にさらに続く。第１井戸跡（ＳＥ１）と重複しており、これよりも古い。

【方向・規模】南北６ｍ、東西20m近い範囲から、細長い小溝跡が30条検出された。長さは一様ではないが、どの小溝跡も直線的に走行しており、上端幅は20～30cmが多く、深さは５～10cmがほとんどであった。これらは、平面的なあり方や方向性などから、大きく２群に分けることができる。ａ群は、方向は真北から10～20°西に偏る方向性を示す例が多く、14条ある。溝跡同士の間隔は60～80cmであり、比較的等間隔に並んでいる。このａ群とほぼ直交す

る形でｂ群が展開する。このｂ群は16条あり、方向は真北から70～80°偏る方向性を示す例が多い。溝跡同士の間隔は30～80cmであるが、中には重複関係を示す例も認められた。

【堆積土】堆積土はほとんどが１層のみ確認された。大半が黄褐色のシルトで、層中にはIV層ブロック・粒子を多量に含んでいた。

【壁・底面】断面は、皿状か「Ｕ」字形をなし、底面には著しい起伏が認められた。

【特記事項】この遺構群は、方向性・形状・堆積土の共通性などから、ａ・ｂ群それぞれが同時に機能していた可能性が高く、ａ・ｂ群はそれぞれ、異なるまとまりの一部を示しているものと考えられる。切り合い関係を見ると、ｂ群の大半をａ群が切っており、ｂ群の方が古いものと考えられる。なお、西側に走行するＳＤ３はａ群の方向性とほぼ一致しており、相互に関連性がうかがわれる。

【出土遺物】出土していない。

（２）第２小溝状遺構群（Ｂ区西半部）

【位置】　Ｂ区　　Ｎ-89.4～94.9　　Ｅ-58.1～72.7

【確認面・重複】IV層上面で確認された。小溝状遺構群の一部の検出とみられ、調査区外にさらに続く。ＳＫ１やピット群と重複しており、これらよりも古い。

【方向・規模】南北６ｍ、東西15m近い範囲から、細長い小溝跡が27条検出された。東半部同様、長さは一様ではないが、どの小溝跡も直線的に走行しており、上端幅は20～30cmが多く、深さは３～10cmがほとんどであった。これらは平面的なあり方や方向性、切り合い関係などから、大きく３群に分けることができる。ａ群は９条あり、方向は真北から０～５°西に偏る方向性を示しており、溝同士の間隔は80cm前後である。ｂ群は、10条あり方向は真北から20～30°西に偏る方向性を示す。溝同士の間隔は１ｍ前後である。ｃ群は６条あり、方向は真北から０～５°西に偏る方向性を示す例が多く、溝同士の間隔は90cm前後であり、その点ではａ群と類似している。

【堆積土】全て堆積土は１層であった。ほとんどが暗褐色のシルトで、層中にはIV層ブロック・粒子が多く含まれていた。なお、ａ群の一部の溝跡の堆積土からは、10Ｃ前半に降下したと考えられる灰白色火山灰が検出されている。

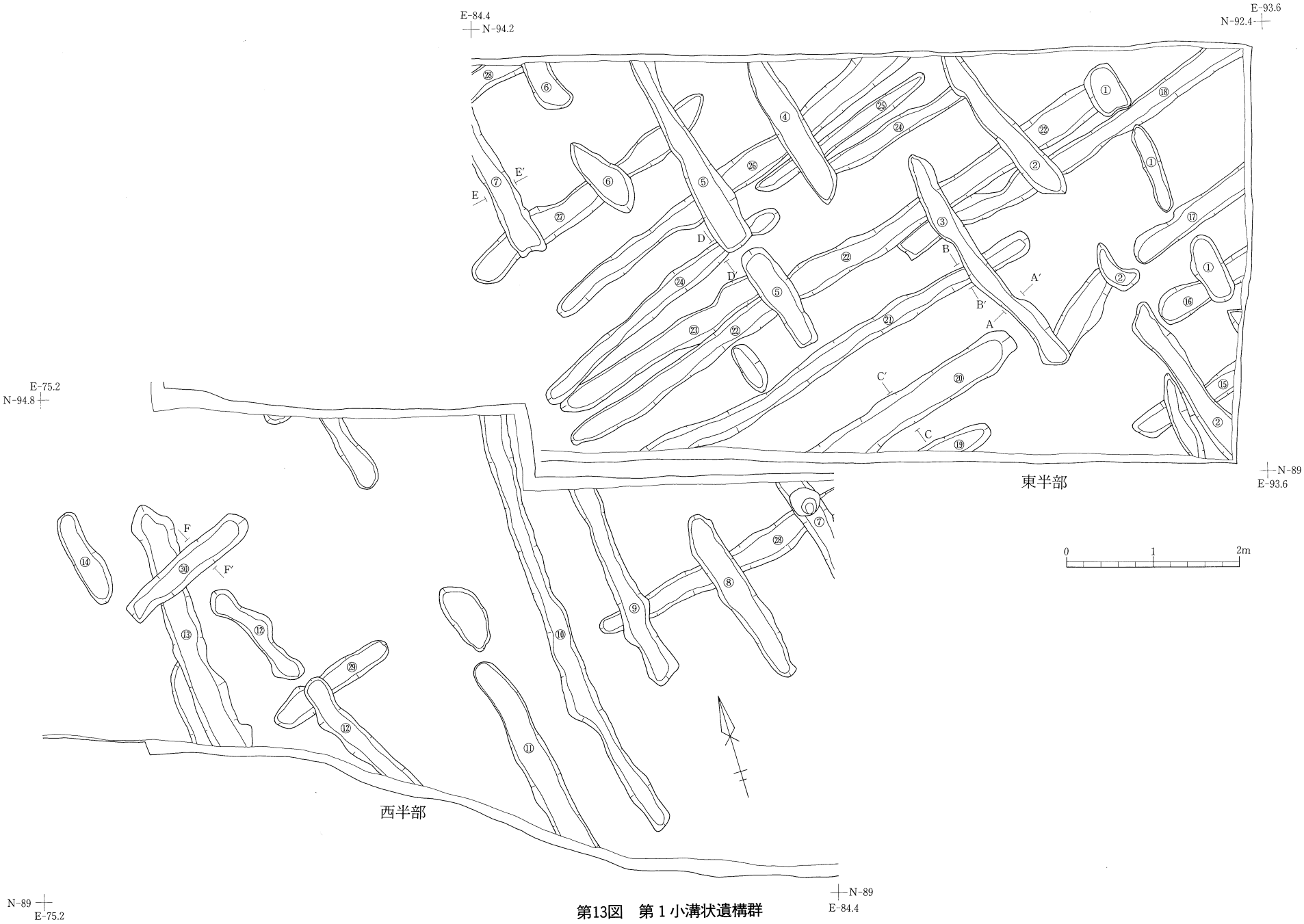
【壁・底面】断面は皿状か「Ｕ」字形をなし、底面には顕著に起伏が認められた。なお、一部の溝跡底面では、形状が三日月状で断面が三角形をなす小さな落ち込みが並んで検出された。これは鋤先痕と考えられる。

【特記事項】これらの遺構群は、第１小溝状遺構群と同様に、形状、堆積土などが共通しており、方向を同じくするａ～ｃ群はそれぞれが同時に機能していた可能性が高く、それぞれ異なるまとまりの一部を示しているものと考えられる。切り合い関係から、ａ群が一番新しく、次いでｂ群が新しく、ｃ群が一番古い。

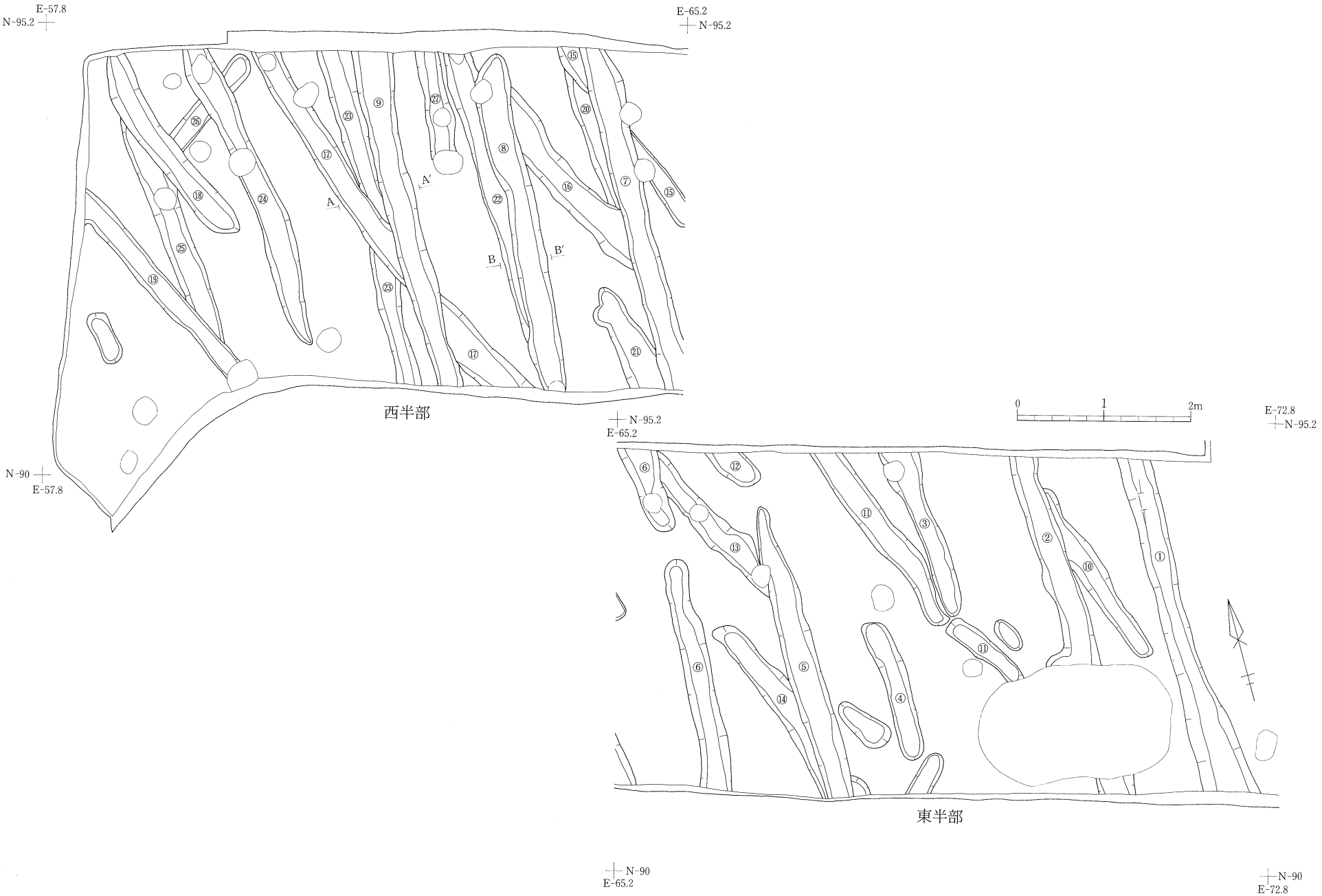
【出土遺物】図示できたのは、堆積土出土の縄文土器破片１点のみである。他に土師器破片が１点出土している。

６．その他の遺物

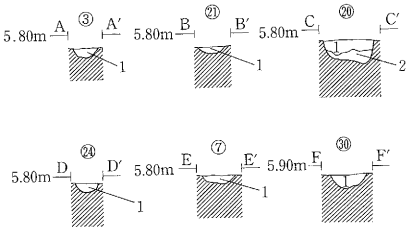
遺構以外の基本層Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層からは若干の遺物が出土しているが、ほとんどが細かな破片資料である。遺物には、縄文土器（１点）・弥生土器（２点）・土師器（22点）・須恵器（６点）・陶器（９点）・磁器（11点）・鉄製品（１点）・銅製品（１点）・石器（１点）・礫（２点）・瓦（１点）がある。その中で図示できたのは、Ａ区Ⅰ層から出土した瀬戸美濃産の折縁鉢口縁部破片１点、相馬産の掛け分け埦底部破片１点、灰釉陶器口縁部破片１点、銅製品１点、Ａ区Ⅲ層から出土した縄文土器体部破片１点、弥生土器体部破片１点、Ｂ区Ⅰ層から出土した在地産の陶器鉢頚部破片１点、Ｂ区Ⅱ層から出土した砥石１点であった。



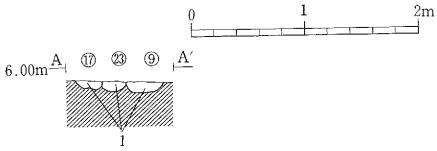
第13図　第１小溝状遺構群



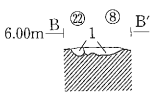
第14図　第２小溝状遺構群

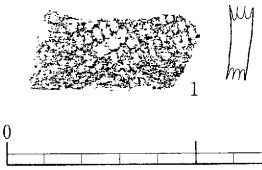


第１小溝状遺構群　断面図



第２小溝状遺構群　断面図





第１小溝状遺構群堆積土

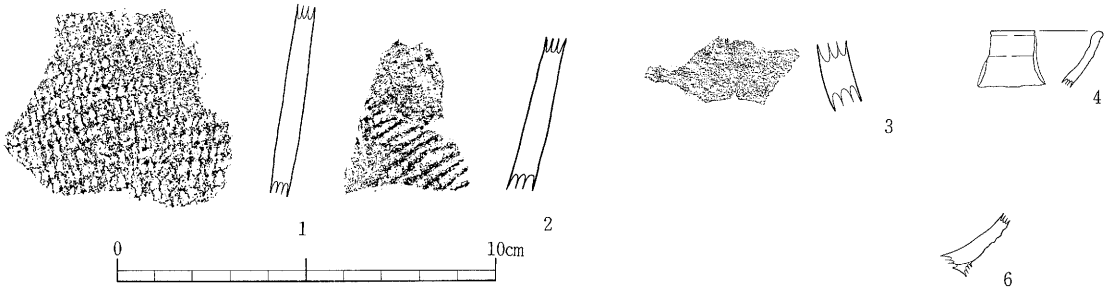
小溝No.	層No.	土色	土性	粘性	しまり	備考	遺物層位
③	1	黄褐色（10YR5/6）	シルト	なし	あり	IV層ブロックを上部に多量に含む。黄褐色土と黒褐色土の割合はおよそ8対2である。	1
㉑	1	黄褐色（10YR5/6）	シルト	なし	あり	III層ブロック（黒褐色）を多量に含む。黄褐色土と黒褐色土の割合はおよそ7対3である。	1
⑳	1	黒褐色（10YR3/2）	シルト	なし	あり	IV層ブロック（黄色）を少量含む。	1
	2	黄褐色（10YR5/6）	シルト	なし	あり	III層ブロック（黒褐色）を少量含む。黄褐色土と黒褐色土の割合はおよそ8対2である。	2
㉔	1	黄褐色（10YR5/6）	シルト	なし	あり	III層ブロック（黒褐色）を少量に含む。黄褐色土と黒褐色土の割合はおよそ7対3である。	1
⑦	1	黄褐色（10YR5/6）	シルト	なし	あり	III層ブロック（黒褐色）を多量含む。黄褐色土と黒褐色土の割合はおよそ8対2である。	1
㉚	1	黄褐色（10YR5/6）	シルト	なし	あり	III層ブロック（黒褐色）を多量に含む。黄褐色土と黒褐色土の割合は6対4である。	1

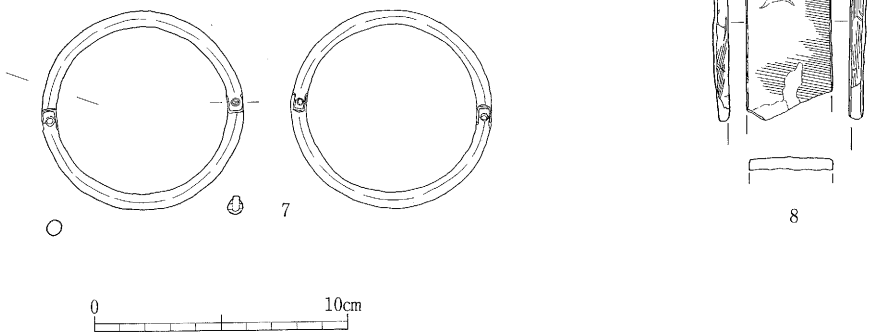
第２小溝状遺構群堆積土

小溝No.	層No.	土色	土性	粘性	しまり	備考	遺物層位
⑰	1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	なし	あり	IV層ブロックを多量に含む。	1
㉓	1	黒褐色（10YR2/3）	シルト	なし	あり	IV層ブロックを少量含む。	1
⑨	1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	なし	あり	IV層ブロックを多量に含む。方向が同じ小溝跡から灰白色火山灰を検出。	1
㉒	1	暗褐色（10YR3/4）	シルト	なし	あり	IV層ブロックを少量含む。	1
⑧	1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	なし	あり	IV層ブロックを多量に含む。植物の根・茎、混在。	1

番号	種別	層位	特徴	残存	法量（cm）			写真図版	登録番号
					口径	底径	器高		
1	縄文土器　深鉢	1層	外面－ＬＲ縄文、内面－ミガキ。胎土に細砂を含む。	体部破片	－	－	－	11－2	A－2

第15図　小溝状遺構群断面図と出土遺物





第16図　Ⅰ～Ⅲ層出土遺物

番号	種別	層位	特徴	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	縄文土器 深鉢	III層	外面－ＬＲ縄文、内面－ミガキ。胎土に細砂を多量に含む。	体部破片	－	－	－	11－3	A－3
2	弥生土器 甕	III層	外面－ＬＲ縄文、内面－ケズリ。胎土に細砂を含む。	体部破片	－	－	－	11－4	B－1

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
3	陶器 鉢	I層	無釉。色調－外面（暗赤褐）、内面（赤褐）。胎土に細砂を多く含む。外面－ヨコナデ、内面－ヨコナデ。	在地	中世	頸部破片	－	－	－	12－2	I－12

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
4	灰釉陶器	I層	灰釉。ロクロナデ。色調－灰オリーブ。	灰釉。ロクロナデ。色調－灰オリーブ。	口縁部破片	－	－	－	11－5	灰－1

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
5	陶器 折縁鉢	I層	内・外面とも灰釉。色調－内・外面（灰白）。内面に鉄絵あり。	瀬戸美濃	17C中頃	口縁～体部 1/12	30.6	－	－	12－5	I－15
6	陶器 掛け分け埦	I層	灰釉と鉄釉の掛け分け。色調－外面（赤褐）、内面（オリーブ灰）。付高台。	相馬	18C	底部破片	－	－	－	12－3	I－16

番号	種別	層位	特徴	径 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	写真図版	登録番号
7	銅製品	I層	半円状の両端部は２点ともそれぞれ凸部と凹部になっており、その２点をつなぎ合わせネジ状の釘(一)で固定すると、環状の輪になる。	8.1	－	0.6	50	13－7	N－1

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
8	砥石	III層	一部欠損。偏平で長方形。硬質でシルト質状の石材。砥面は３面で上面の中央部にわずかにへこみがみられる。	(8.3)	3.4	(0.5)	(30)	石英安山岩質凝灰岩	13－6	K－1

Ⅰ～III層の出土遺物観察表

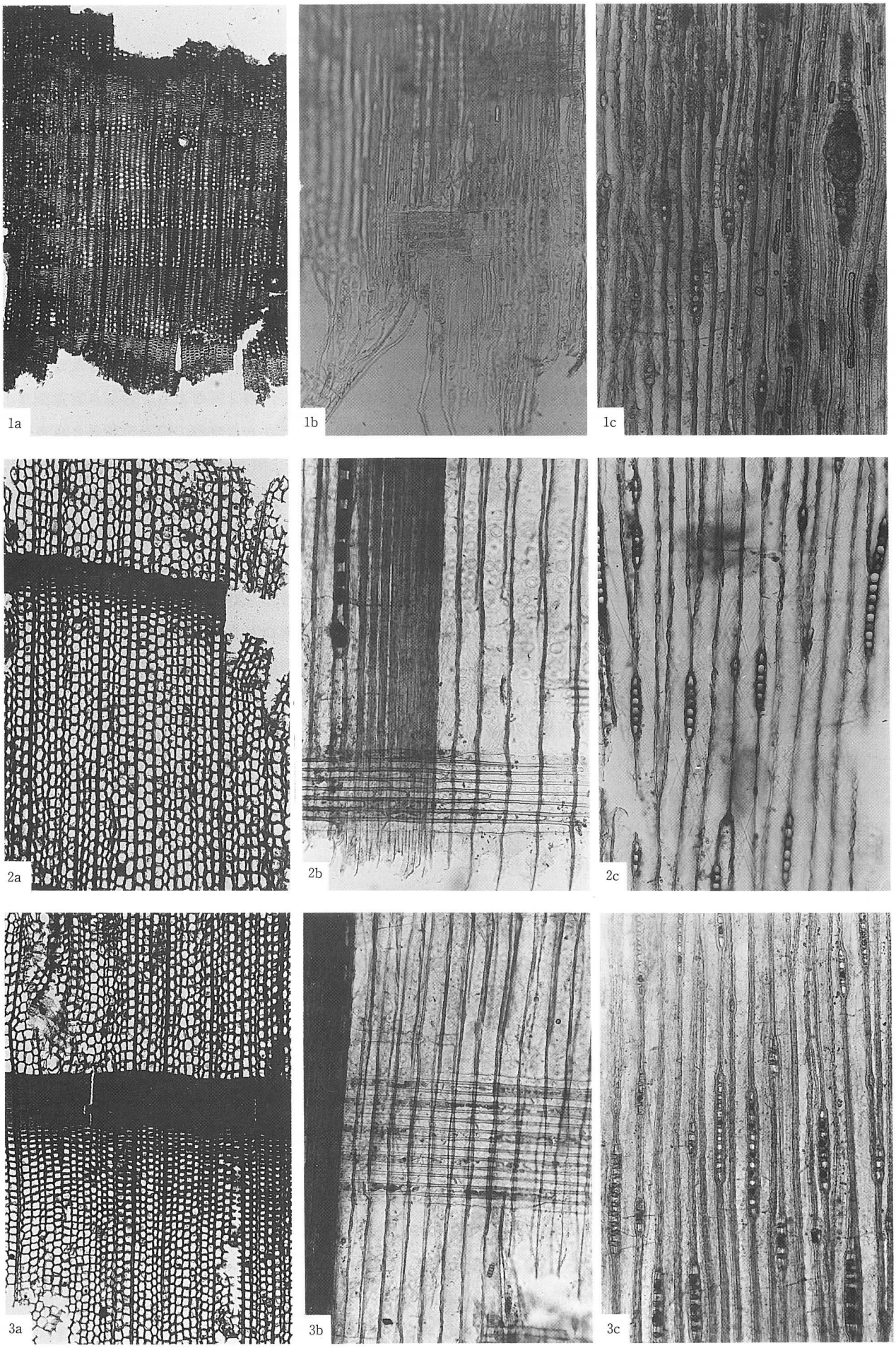
Ⅶ. 分析結果

中田南遺跡第２次調査出土材の樹種

木工舎 「ゆい」 高橋 利彦

試料番号	用途	遺構	種名
L－1	つけ木？	SE1-6	マツ属複維管束亜属の一種
L－2	つけ木？	SE1-6	マツ属複繊管束亜属の一種
L－3	曲物側板	SE2-2	アスナロ
L－4	曲物側板	SE2-3	スギ
L－5	曲物側板	SE2-3	スギ
L－6	曲物底板	SE2-3	スギ
L－7	不明	SE2-2	アスナロ類似種
L－8	材片	SE2-2	アスナロ類似種

図版 1．マツ属複維管束亜属の一種 L-1
2．スギ L-4
3．アスナロ L-3
a：木口 x40 b：柾目 x100 c：板目 x100
樹木の肥大生長方向はは木口では画面下から上へ，柾目では左から右。



第17図　出土材顕微鏡写真

Ⅷ. まとめ

1．中田南遺跡は名取川下流域の南岸部に形成された自然堤防上に立地しており、主に古代・中世の集落跡として知られている。

2．今回の調査は2次にあたり、2箇所とも調査区は遺跡の北東部に位置する。今回の調査区は1次調査の対象地区内にあり、近辺からは平安時代に属する小溝状遺構群、中世に属する竪穴遺構や井戸跡などが発見されていた。

3．今次の調査ではA区では2条の溝跡が、B区では1条の柱穴列を含むピット群、2基の井戸跡、1基の土坑、1条の溝跡、2群の小溝状遺構群が、それぞれ検出された。また、出土遺物には縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶器・磁器・金属製品・砥石・磨面をもつ礫・木製品などがあるが、図示できたものは極めて少なかった。

4．遺構の中で出土遺物から時期が確定できるものにはB区から検出された井戸跡2基がある。いずれも素掘りの井戸で、基本層Ⅳ層を2 m前後の砂層か粘土層まで掘削している。第1井戸跡からは在地の白石窯製品とみられる陶器の甕などが堆積土中から出土しており、また、同じく出土している土師質土器皿は1次調査のⅡ2B類とされ、13世紀後半頃に位置付けられたものに特徴が近似している。以上からこの井戸跡の時期については大まかに13世紀後半頃に比定されよう。なお、この井戸跡から出土した木製品の中にはつけ木ではないかとしたものが2点ある。これは長さが10cm未満で、細くあまり手の加えられていない木材片を素材としており、その太い方の先端部に焦痕が認められるものである。類例は、中田南遺跡第1次調査の第5号井戸跡でも出土している。今回の資料は、マツ属の一種との樹種同定結果が出ており、今後、民俗事例なども含めて、つけ木かどうかを検討していきたい。第2井戸跡からは常滑産とみられる壷が堆積土中から出土している。この壷はその口縁端部が上方につまみ上げられる特徴を有するもので、最近の中世常滑焼における中野晴久氏の編年（中野：1994）によると、第二段階の最初の型式である5型式期の広口壷にその形態的特徴が近似する。この5型式期は13世紀前半を中心とした年代が与えられており、このことから第2井戸跡もその年代に近い時期のものと考えられる。これらの2基の井戸跡の西側からは多数のピットが検出された。これらの多くは柱痕跡も確認されており、柱穴と考えられ、その中には組み合う柱穴列も確認された。伴なう遺物がなく、これらの柱穴群の時期については確定できないが、平安時代頃とみられる後述する小溝状遺構群を切っており、それよりは新しい。また、柱穴の特徴が1次調査の中世の掘立柱建物跡の柱穴と共通することなどから、ほぼ中世頃の柱穴群と考えられる。また、井戸跡の付近に分布する点からみれば、いずれかの井戸跡に伴う遺構の可能性も考えられる。

1次調査では今回のA区の南および西方において、中世前半頃の遺構が発見されており、陶器や土師質土器皿・木製品などが多く出土している。今回の調査で、さらに遺跡の北東部においても中世前半頃の居住に関わる遺構が確認されたことになり、この時期の居住域の広がりが広範にわたっていたことが明らかになった。

5．B区ではほぼ全域から小溝状遺構が検出された。これらはB区中央を南北方向に走る第3溝跡を界して、方向性などから、2群にまとめられた。東半部の第1小溝状遺構群は真北方向から西に10～20°偏した方向性をもつa群と、そのa群とほぼ直交するb群の2つのまとまりがみられる。両群は重複しており、a群がb群より新しい。こうした方向性のあり方は今回のB区の東側で検出されている1次調査の第9号小溝状遺構群のa群・b群と共通しており、その広がりの一部と考えられる。1次調査ではa・b両群が平面的にその分布を異にしていることから、同時に掘り込まれ、機能していた可能性が考えられたが、今回の調査により、複数の重複する遺構群であることが確認された。

西半部の第2小溝状遺構群は3つの重複関係があり、それぞれ、異なる方向性をもつa・b・cの3群にまとめられた。なお、3群とも第1小溝状遺構群とはわずかではあるが、方向性を異にしており、第1・第2両遺構群の

関係については一連のものが存在するかどうかは明らかにはできなかった。ただし、第３溝跡の方向が第１小溝状遺構群のａ群とほぼ一致していることや、この溝跡と小溝状遺構群との重複関係がみられないこと、この溝跡を境にして東西の小溝状遺構群に方向性の差異がみられたことなどの平面的なあり方から溝跡および両小溝状遺構群は相互に関連し合う遺構であった可能性もうかがわれる。

これらの小溝状遺構群はいずれも時期を決定できる遺物がなく、時期については明確にはできないが、１次調査の第９号小溝状遺構群が平安時代頃と推定されていること、小溝の一部の堆積土中から10世紀前半に降下したと考えられている灰白色火山灰が検出されていることなどから、今回の小溝状遺構群についても大まかに平安時代頃に属するものと推定される。こうした小溝状遺構群の性格については、１次調査では畠跡を想定している。１次調査と同様に、今回の調査でも小溝の多くが幅が20～30cmで、深さが５～10cmの規模をもち、堆積土は１層でIV層のブロックが多量に混在する層であり、底面には著しい起伏がみられた。一部の小溝の底面では垂直方向の鋤先痕とみられる痕跡も確認されている。このような特徴から、これらの小溝は深く掘削されて、その直後に埋め戻されたものと理解される。同様の特徴をもつ小溝状遺構群は仙台市でも最近その検出例が増加している。その１つである下ノ内浦遺跡では遺存良好な畠跡が検出されている(佐藤：1993)。この畠跡では耕作土上面では多数の畝が検出され、耕作土下面からは畝とは方向の異なる多数の小溝が検出された。この小溝については「畠耕作に伴う天地返しの痕跡」(前掲文献)とされ、畠の耕作痕と考えられている。中田南遺跡において検出されている小溝状遺構群は下ノ内浦遺跡の小溝群と特徴がほぼ共通することから、畠の耕作に伴って掘り込まれた痕跡と考えられる。

１次調査では平安時代の遺構が調査区のほぼ全域から発見されているが、北東部では居住に関わる遺構はほとんどなく、小溝状遺構群などの生産に関わる遺構の存在が知られている。今回の調査で、さらにこうした生産域の広がりが確認されたことになり、中田南遺跡における平安時代の土地利用のあり方を知る上で重要な知見を得たといえよう。

引用・参考文献

太田昭夫（1994）：「仙台市中田南遺跡－古代・中世の集落跡の調査」『仙台市文化財調査報告書』第182集
仙台市教育委員会

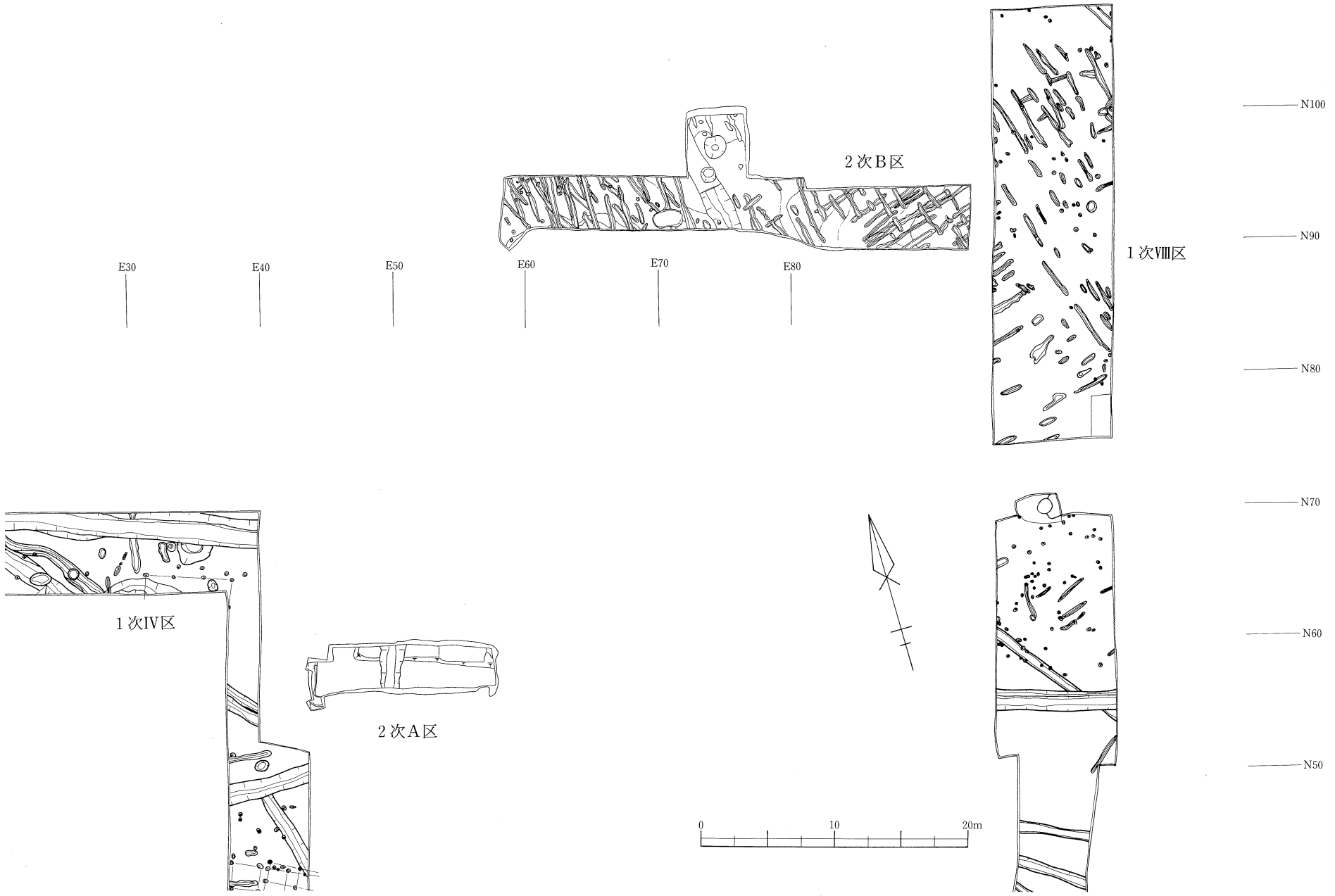
佐藤甲二（1993）：「下ノ内浦遺跡－第４次発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第173集
仙台市教育委員会

赤羽一郎・中野晴久（1994）：「生産地における編年について」『中世常滑焼をおって』資料集　日本福祉大学
知多半島総合研究所

白鳥良一（1980）：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』VII　宮城県多賀城跡調査研究所

庄子貞雄・山田一郎（1980）：「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城跡-昭和54年度調査概報』
宮城県多賀城跡調査研究所

小山正忠・竹原秀雄（1976）：『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社



第18図　第１・２次調査の遺構分布

写　真　図　版

写真１　中田南遺跡周辺の空中写真（昭和36年撮影 ― 国土地理院）

1．A区確認状況
（西から）

2．第2溝跡確認状況（南から）

第2溝跡検出状況（南から）

写真2　A区の遺構（1）

1．第１溝跡
確認状況
（南から）

2．第１溝跡検出状況（南から）

写真３　Ａ区の遺構（２）

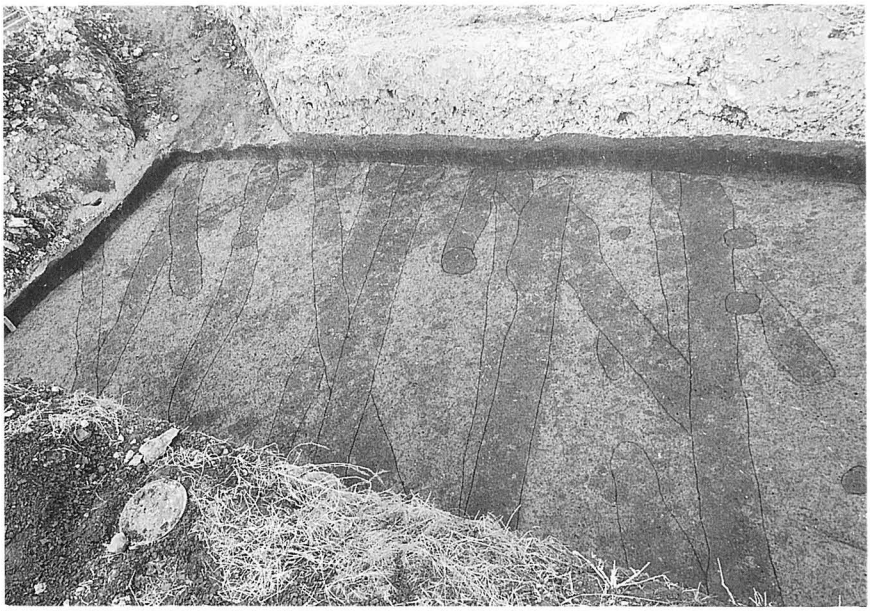
1．B区東半部
確認状況
（南西から）

2．B区中央部
確認状況
（南から）

3．B区西半部
確認状況
（南西から）

写真４　B区の遺構（１）

1．B区西半部
確認状況
（南から）



2．B区西半部
検出状況
（東から）

3．ピット群・第2小溝状
遺構群検出状況
（西から）

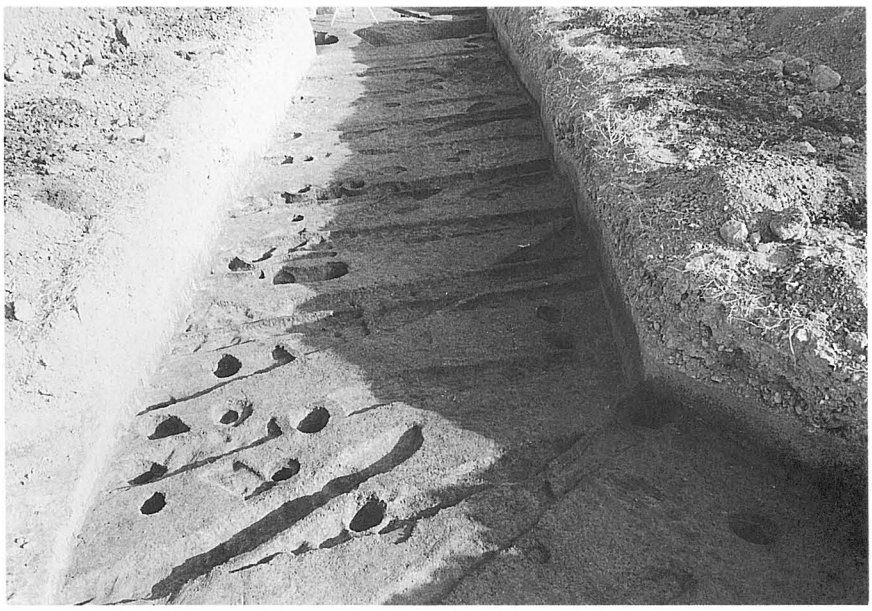
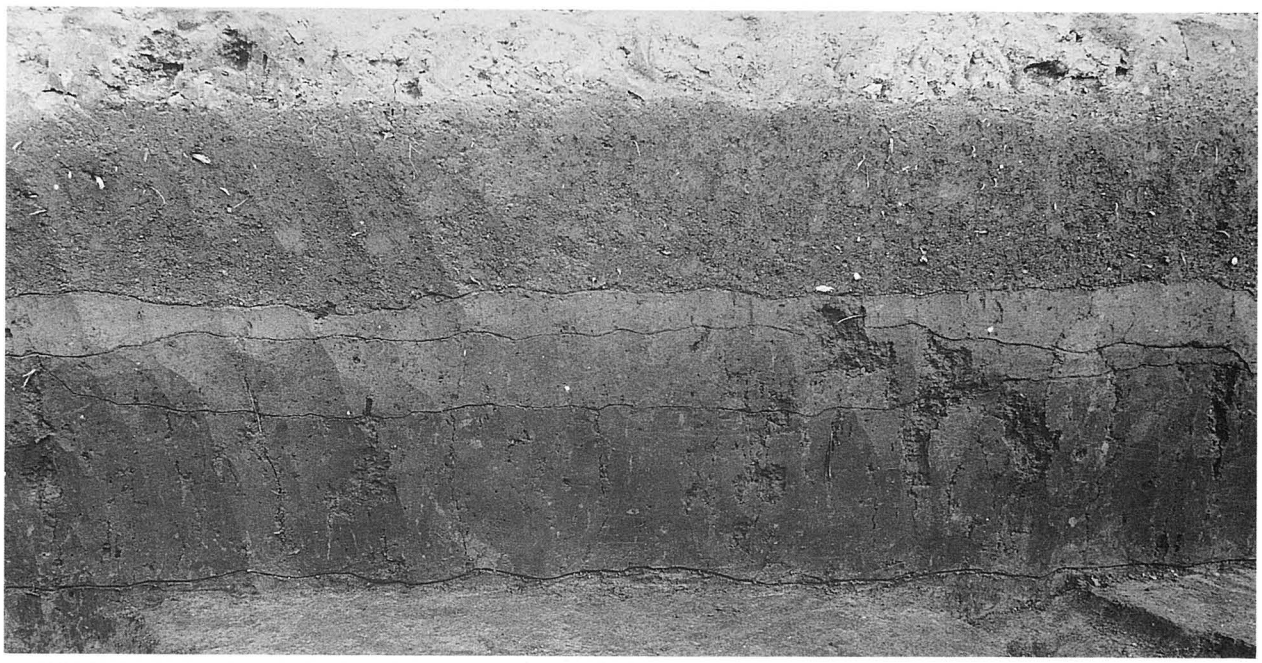


写真5　B区の遺構（2）

1．第３溝跡
検出状況
（南から）

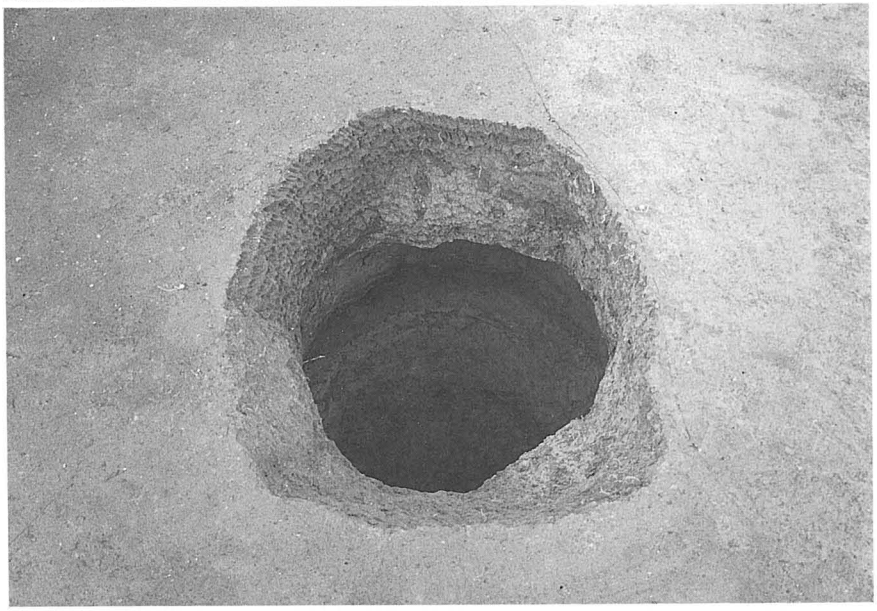


2．Ｂ区北半部セクション（南から）

写真６　Ｂ区の遺構およびセクション

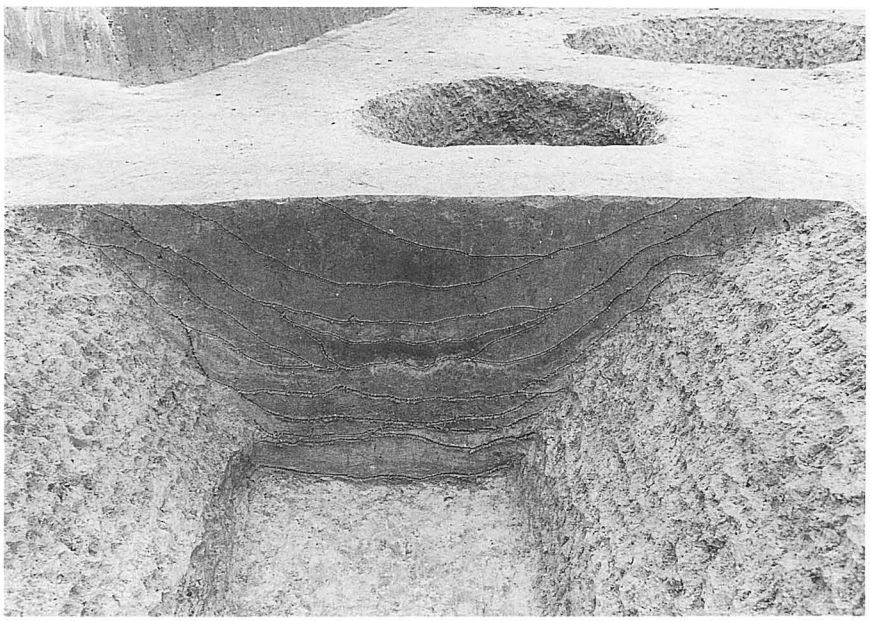
1．第１井戸跡
検出状況
（南から）

2．第２井戸跡
検出状況
（南から）



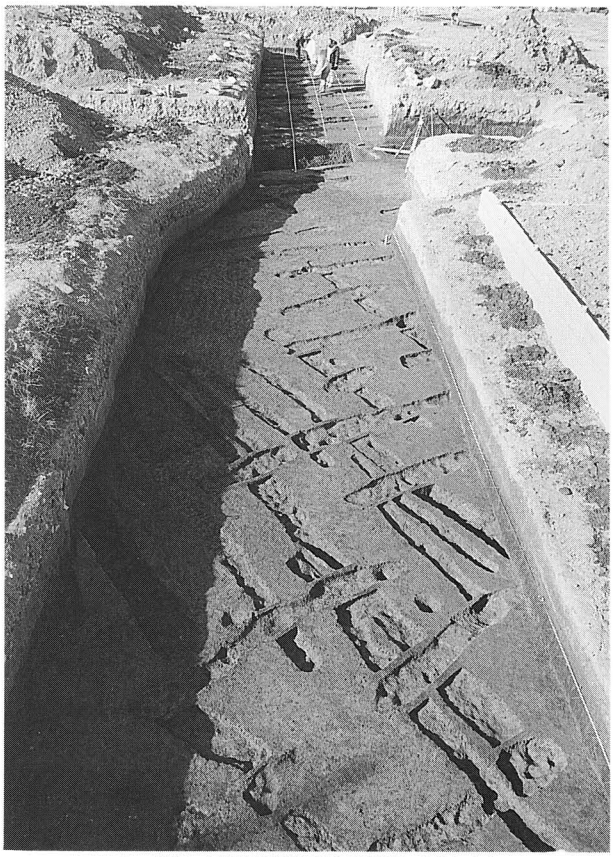
3．第１土坑
検出状況
（東から）

写真７　第１・２井戸跡、第１土坑検出状況



1．第3溝跡セクション（南から）

2．第1小溝状遺構群確認状況（東から）

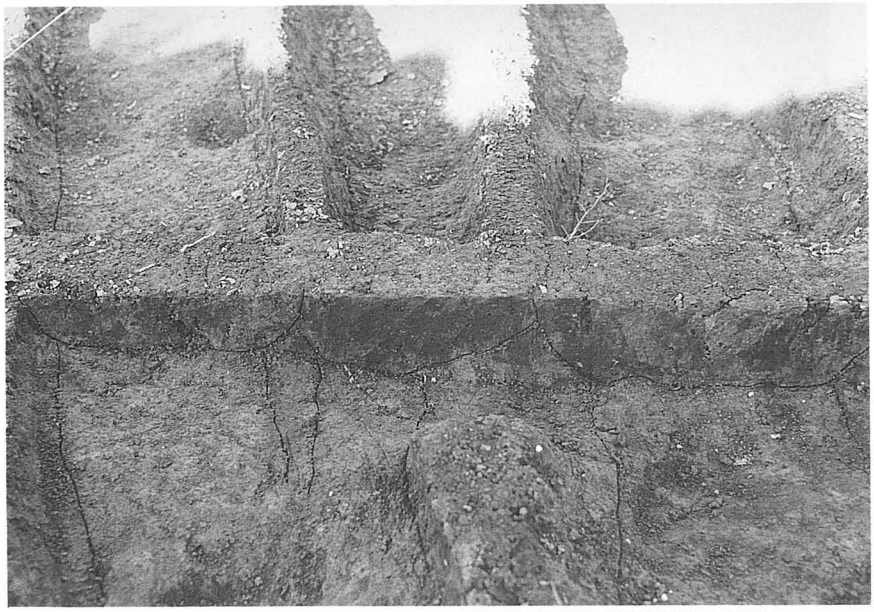


3．第1小溝状遺構群検出状況（東から）

写真8　第3溝跡・第1小溝状遺構群

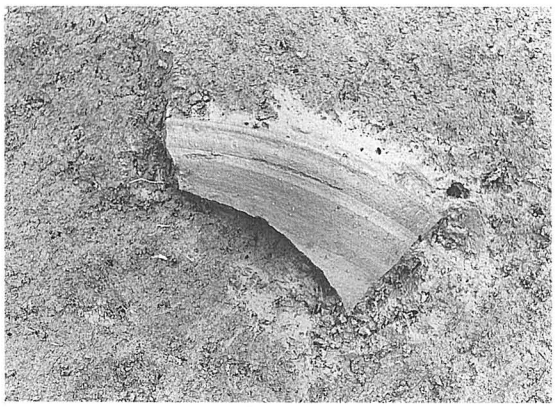
1．第１小溝状遺構群
㉚セクション
（西から）

2．第２小溝状遺構群
⑰㉓⑨セクション
（南から）



3．第２小溝状遺構群
㉒⑧セクション
（南から）

写真９　第１・２小溝状遺構群セクション

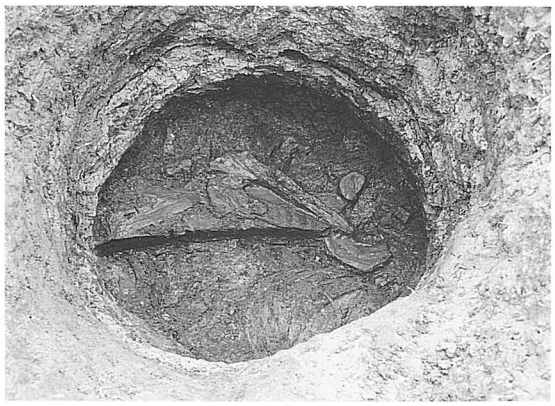


1．第１井戸跡陶器出土状況

2．第１井戸跡土師質土器出土状況

3．第１井戸跡陶器出土状況

4．第２井戸跡曲物出土状況



5．第２井戸跡木製品出土状況

6．第２小溝状遺構群灰白色火山灰確認状況

7．第２小溝状遺構群鋤先痕検出状況

8．鋤先痕完掘状況

写真10　出土遺物など

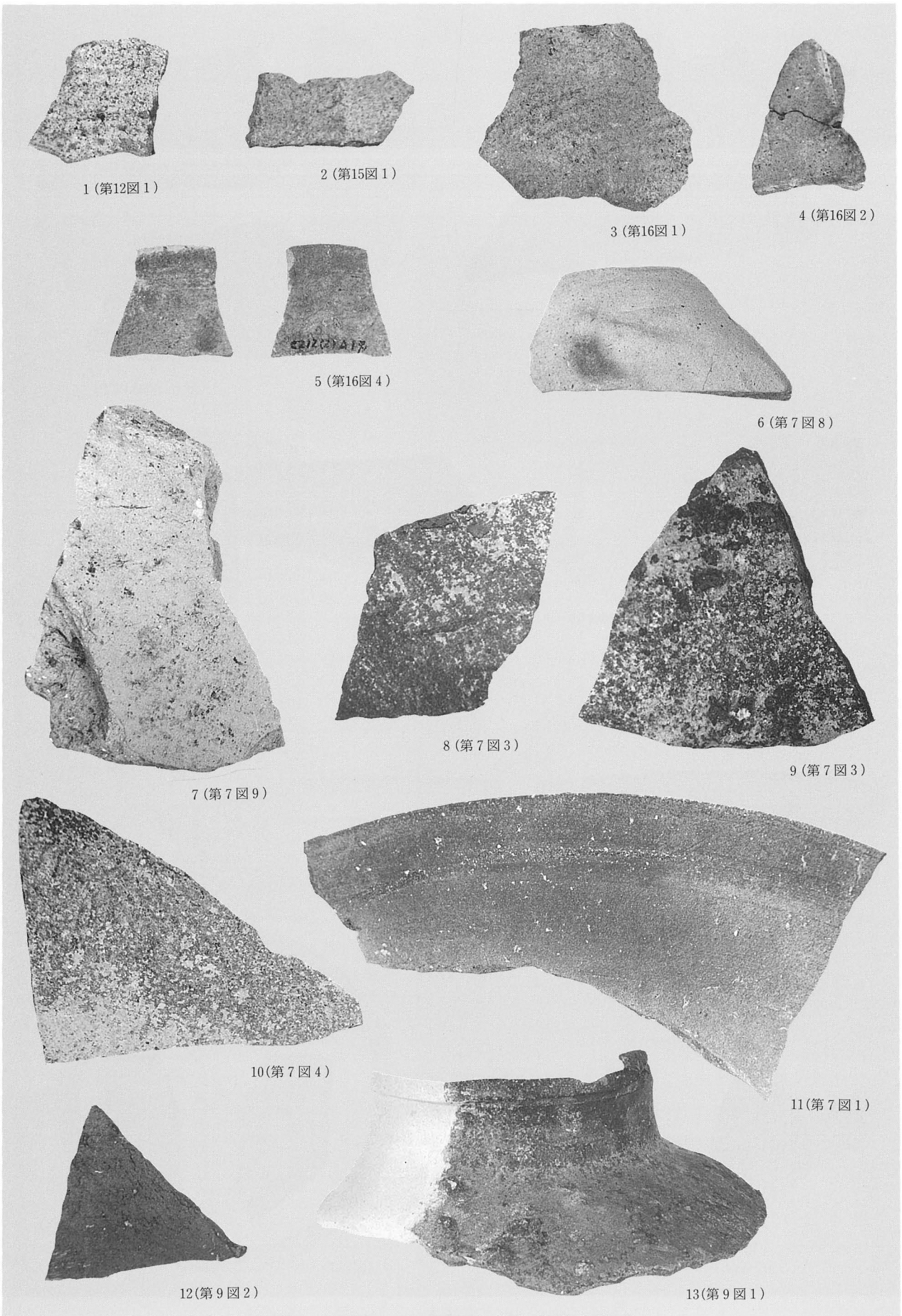
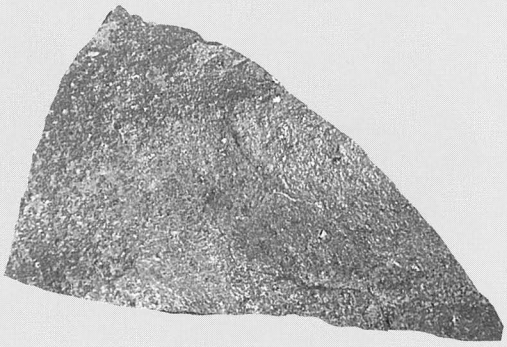
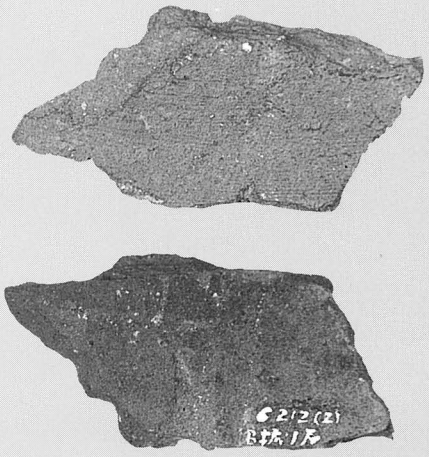


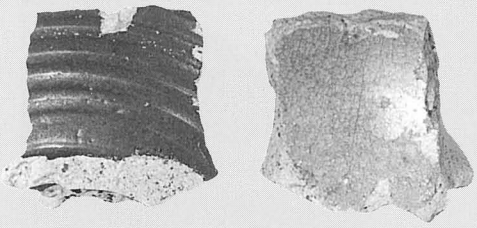
写真11　縄文土器・弥生土器・土師質土器・陶器（１）



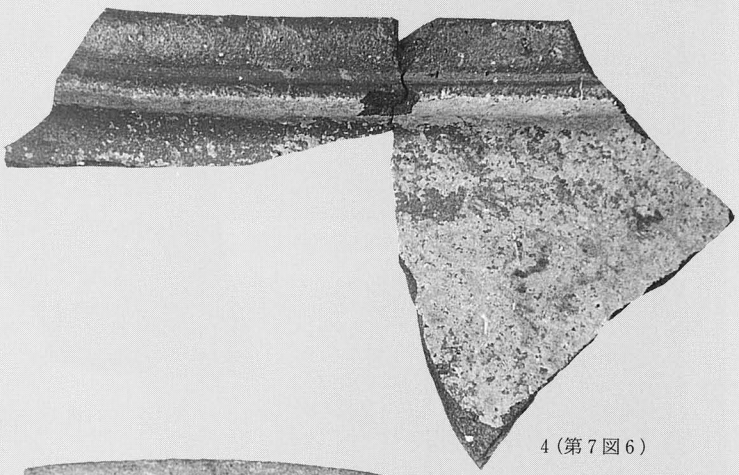
1（第７図７）



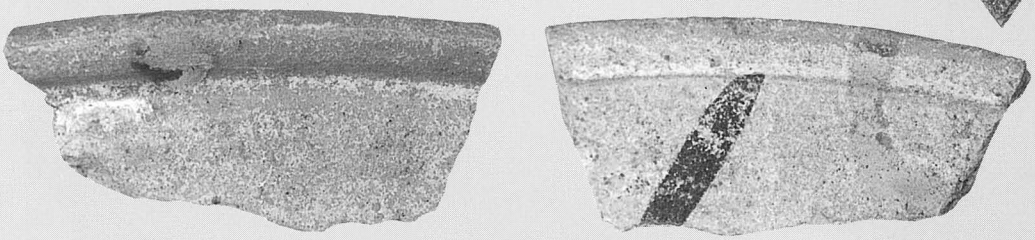
2（第16図３）



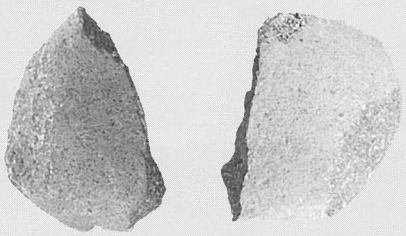
3（第16図６）



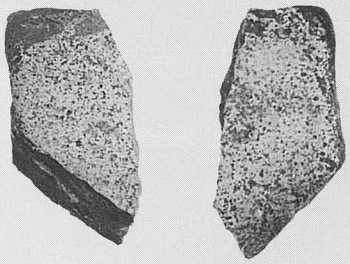
4（第７図６）



5（第16図５）

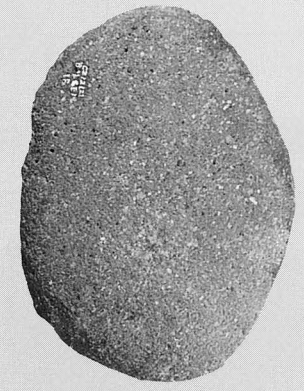


6（第８図２）



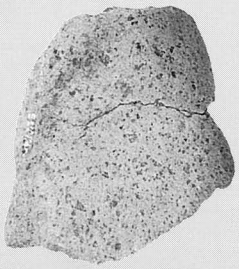
7（第８図４）

写真12　陶器（２）・石製品（１）（磨面をもつ礫）

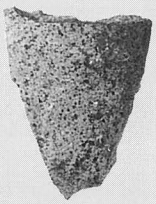


1（第８図１）

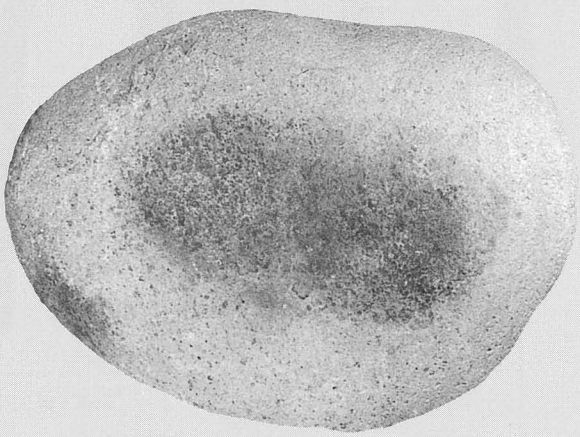
2（第８図３）

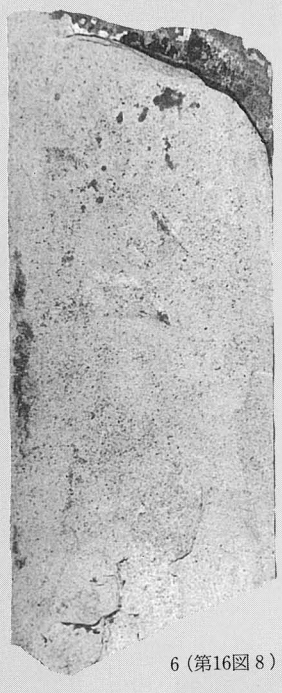


3（第８図５）



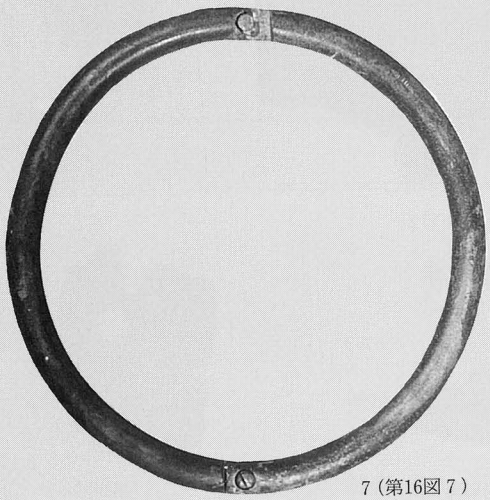
4（第８図６）



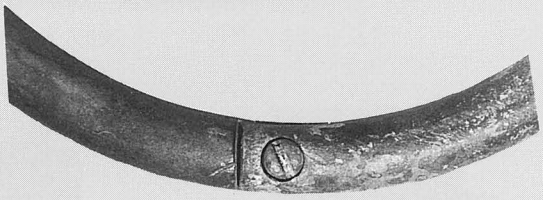


6（第16図８）

5（第８図７）



7（第16図７）

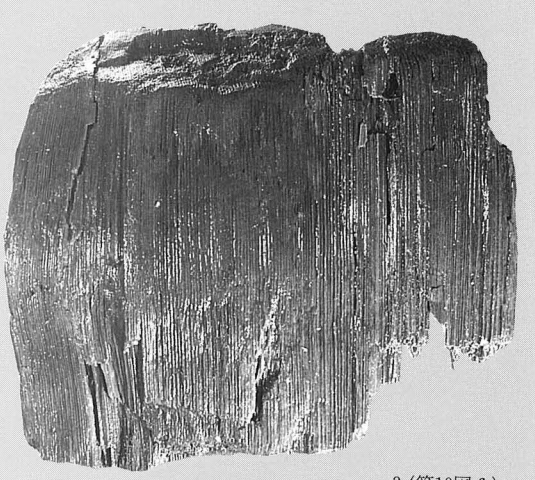


7の拡大

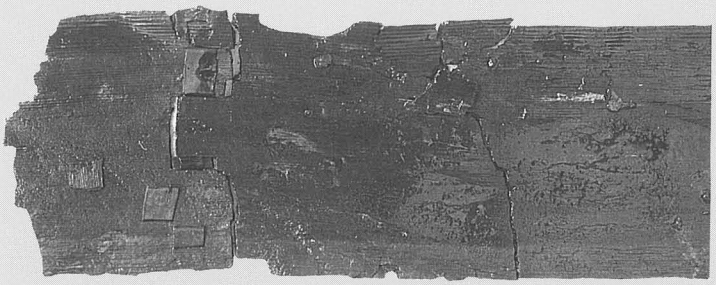
写真13　石製品（２）（磨面をもつ礫・砥石）銅製品

1（第８図８）

2（第８図９）

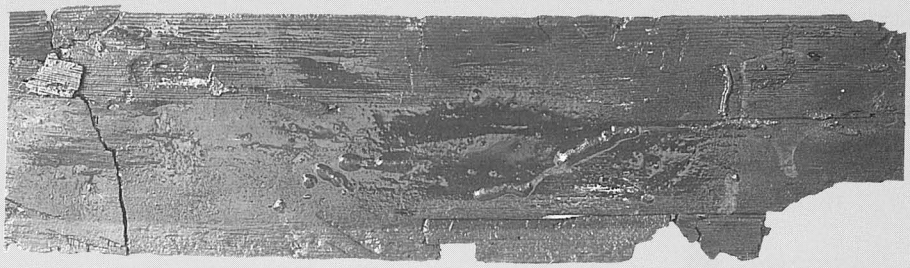


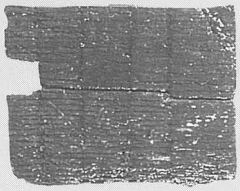
3（第10図６）



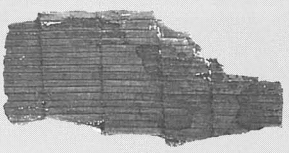
4（第10図１）

5（第10図４）

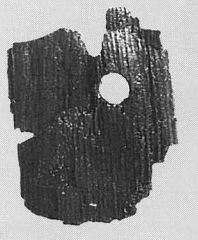




6（第10図２）



7（第10図３）



8（第10図５）

写真14　木製品（つけ木？・曲物など）

報告書抄録

ふりがな	なかだみなみいせき
書名	中田南遺跡
副書名	第2次調査報告書
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第206集
編著者名	三塚　靖・太田昭夫
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-71 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7－1　TEL 022-214-8893～4
発行年月日	1995年7月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
中田南遺跡 （なかだみなみいせき）	宮城県仙台市太白区（みやぎけんせんだいしたいはくく） 中田七丁目225－1外（なかだ）	041009	01272	38° 11′ 32″	140° 52′ 44″	19941201 ～ 19941222	210	宅地造成に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中田南遺跡	集落跡 畠跡	平安 ・ 中世	畠跡（平安） 井戸跡・溝跡（中世）	縄文土器片・弥生土器片・陶器片・木製品・石器・磨面をもつ礫・銅製品	

仙台市文化財調査報告書第206集

中田南遺跡

―第2次調査報告書―

平成7年7月

発行　仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町3－7－1

仙台市教育委員会文化財課

印刷　㈱東北プリント

仙台市青葉区立町24－24　TEL263-1166